

表象文化史特論 A

(春学期 / 2 単位)
松友 知香子

●テーマ

E・H・ゴンブリッチのイメージ読解欧米表象文化を通じた国際理解 (1)

●授業概要

E・H・ゴンブリッチ (1909-2001) は、ウィーン大学に学び、以後ロンドンのウォーバーグ研究所で芸術研究を行った美術史家である。この授業では、彼の論文やエッセイ、講演をまとめた『棒馬考』を精読し、芸術のシンボルやメタファー解釈における心理学的・精神分析学的方法について考察を行い、欧米の表象文化を通して、国際理解力を高める。

●到達目標

芸術的イメージの起源、近代芸術における〈抽象〉と〈表現〉というテーマに対して、心理学的・精神分析的にアプローチする方法を考察する。

●授業計画

第1回 西洋美術史学におけるゴンブリッチ

第2回『棒馬考』講読:「棒馬 あるいは芸術形式の根源についての考察」(1) 抽象

第3回『棒馬考』講読:「棒馬 あるいは芸術形式の根源についての考察」(2) 表現

第4回『棒馬考』講読:「棒馬 あるいは芸術形式の根源についての考察」(3) 描写

第5回『棒馬考』講読:「芸術上の価値の視覚的隠喩」(1) コードと隠喩

第6回『棒馬考』講読:「芸術上の価値の視覚的隠喩」(2) シンボルとしての黄金

第7回『棒馬考』講読:「芸術上の価値の視覚的隠喩」(3) 線

第8回『棒馬考』講読:「芸術上の価値の視覚的隠喩」(4) 美と真

第9回『棒馬考』講読:「精神分析と美術史」(1) ピカソ

第10回『棒馬考』講読:「精神分析と美術史」(2) 女性の像

第11回『棒馬考』講読:「精神分析と美術史」(3) 抑圧

第12回『棒馬考』講読:「相貌的知覚について」(1) 抽象

第13回『棒馬考』講読:「相貌的知覚について」(2) 表現

第14回『棒馬考』講読:「相貌的知覚について」(3) 相貌的知覚とは

第15回『棒馬考』講読:まとめ

●事前学習

該当する箇所を予め熟読し、不明瞭な箇所をチェックしておくこと。また欧米の芸術作品や映画に親しみ、講義の参考とすること。各回約2時間の事前学習を要する。

●事後学習

講義で扱った箇所を読み直し、自分の言葉で要約を作成すること。各回約2時間の事後学習を要する。

●成績評価

平常点 50%、プロトコル 50% (講読した論文等を要約し、次回の講義にレジュメとして配布)

●テキスト

・E・H・ゴンブリッチ著 二見史郎、谷川渥他訳『棒馬考』(1988) 勁草書房

●参考書・参考資料等

・高階秀爾ほか著 『西洋美術史学ハンドブック』新書館 1997年

●備考

特になし。

●オフィスアワー

講義期間中毎週火曜日 12:00~13:00 7520 研究室

表象文化史特論 B

(秋学期 / 2 単位)
松友 知香子

●テーマ

E・H・ゴンブリッチのイメージ読解と欧米表象文化を通じた国際理解 (2)

●授業概要

E・H・ゴンブリッチ (1909-2001) は、ウィーン大学に学び、以後ロンドンのウォーバーグ研究所で芸術研究を行った美術史家である。この授業では、彼の論文やエッセイ、講演をまとめた『棒馬考』を精読し、芸術のシンボルやメタファー解釈における心理学的・精神分析学的方法について考察を行い、欧米の表象文化を通して、国際理解力を高める。

●到達目標

芸術的イメージの起源、近代芸術における〈抽象〉と〈表現〉というテーマに対して、心理学的・精神分析的にアプローチする方法を考察する。

●授業計画

第1回『棒馬考』講読:「表現と伝達」(1) 表現

第2回『棒馬考』講読:「表現と伝達」(2) 伝達

第3回『棒馬考』講読:「アンドレ・マルローと表現主義の危機」(1) アンドレア・マルローのプリミティブ

第4回『棒馬考』講読:「アンドレ・マルローと表現主義の危機」(2) 表現主義

第5回『棒馬考』講読:「西欧の静物画における伝統と表現」(1) シャルダンとピカソ

第6回『棒馬考』講読:「西欧の静物画における伝統と表現」(2) ドラクローワとセザンヌ

第7回『棒馬考』講読:「西欧の静物画における伝統と表現」(3) 静物

第8回『棒馬考』講読:「芸術家と学問」(1) 芸術

第9回『棒馬考』講読:「芸術家と学問」(1) 学問

第10回『棒馬考』講読:「ロマン主義時代における図像表現と芸術」(1) ロマン主義

第11回『棒馬考』講読:「ロマン主義時代における図像表現と芸術」(2) 寓意画

第12回『棒馬考』講読:「ロマン主義時代における図像表現と芸術」(3) 象徴的イメージ

第13回『棒馬考』講読:「風刺漫画家の兵器庫」(1) 比喩的表現

第14回『棒馬考』講読:「風刺漫画家の兵器庫」(2) 凝縮と比較

第15回『棒馬考』講読:「風刺漫画家の兵器庫」(3) 人物のカリカチュア

●事前学習

該当する箇所を予め熟読し、不明瞭な箇所をチェックしておくこと。また欧米の芸術作品や映画に親しみ、講義の参考とすること。各回約2時間の事前学習を要する。

●事後学習

講義で扱った箇所を読み直し、自分の言葉で要約を作成すること。各回約2時間の事後学習を要する。

●成績評価

平常点 50%、プロトコル 50% (講読した論文等を要約し、次回の講義にレジュメとして配布)

●テキスト

・E・H・ゴンブリッチ著 二見史郎、谷川渥他訳『棒馬考』(1988) 勁草書房

●参考書・参考資料等

・高階秀爾ほか著 『西洋美術史学ハンドブック』新書館 1997年

●備考

特になし。

●オフィスアワー

講義期間中毎週火曜日 12:00~13:00 7520 研究室

言語特論A

(春学期 / 2単位)
濱田 英人

●テーマ

認知メカニズムから人間が環境をどのように把握するかについて研究を深めることで地域共創力を養う。

●授業概要

本特論では、ことばと認識について知覚作用と認識作用の視点から考察する。具体的には知覚対象の認識から言語化に至る過程でどのような知覚操作が関わっているのかについて理解を深める。我々は、対象物を知覚することそれは目の網膜から脳内に取り込まれることで表現(representation)が生じ、それを言語化の対象としている。このことから言語は脳内現象であり、知覚対象の言語化には認知主体の一定の認知処理が必然的に関与している。その認知処理のメカニズムを明らかにすることによって言語の本質について理解を深める。

●到達目標

人間の知覚と認識のメカニズムについて理解を深める。

●授業計画

- 第1回 : 知覚と認識のメカニズム
- 第2回 : メタ認知
- 第3回 : 人間の基本的認知能力
- 第4回 : 人間の概念形成のメカニズム
- 第5回 : Figure/Ground 認知と言語
- 第6回 : 言語の意味の在り方
- 第7回 : アフォーダンス理論
- 第8回 : 主体化
- 第9回 : Perceptual Symbol Systems
- 第10回 : 空間認知と言語
- 第11回 : 文法化
- 第12回 : 人間の空間認知と言語
- 第13回 : engaged cognition/disengaged cognition
- 第14回 : 言語の身体性
- 第15回 : まとめ

●事前学習

予め指定された文献を読み、疑問点を整理して授業に参加する。
各回約2時間の事前学習を要する。

●事後学習

学習した概念の観点から各自の興味のある言語現象について考察する。
各回約2時間の事後学習を要する。

●成績評価

授業での発表(20%)、研究レポート(80%)
講評をお知らせ配信で伝えます。

●テキスト

- Barsalou, L.W.(1999) "Perceptual Symbol Systems," *Behavioral and Brain Science* 22 : 577-660.
- 濱田英人(2016)『認知と言語－日本語の世界・英語の世界』開拓社, 東京
- 本多 啓(2005)『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会
- Langacker. Ronald W.(2008) *Cognitive Grammar : A Basic Introduction*. Oxford : Oxford University Press.
- Veenman.M.V.J.,Bernadette.H.A.M,Van Hount - Wolters.and P. Affelerbach.(2006) "Metacognition and Learning : Conceptual and Methodological Consideration." *Metacognition Learning* 1.3-14

●参考書・参考資料等

授業の中で関連分野の文献について適宜指示する。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

毎週月曜日 15:00～16:00 濱田研究室

言語特論B

(秋学期 / 2単位)
濱田 英人

●テーマ

人間の世界の切り取り方とそれを表示する言語的装置について理解を深め、言語共同体の事態把握の在り様の違いを研究することで地域共創力を養う。

●授業概要

本特論では、前期の基礎研究を踏まえて、言語話者の事態認識の在り様と言語化の関係を具体的な言語現象を考察することによって明らかにする。具体的には、言語話者が基本的な認知能力を活性化して世界をどのように切り取っているかが個別言語を特徴付けていることを日本語と英語の言語現象を対照的に考察することによって明らかにする。

●到達目標

人間の事態認識と言語化の関係、また個別言語を特徴付ける根源的基盤について理解を深める。

●授業計画

- 第1回 : 脳のメカニズム (能動態、受動態、中動態)
- 第2回 : 日本語の「被害受け身」のメカニズム
- 第3回 : 英語の受動態
- 第4回 : 日本語の「V テイル」と英語の ' be V-ing '
- 第5回 : 日本語の「た」の意味論
- 第6回 : 英語のテンス
- 第7回 : 日本語の「類別詞」の発達
- 第8回 : 日本語の「擬態語」の根源的基盤
- 第9回 : 英語の「可算名詞」「不可算名詞」の原理
- 第10回 : 存在表現の日英比較
- 第11回 : 知覚・認識と言語の語順
- 第12回 : 事態内参与者の言語化・非言語化のメカニズム
- 第13回 : 日英語の知覚構文
- 第14回 : 左脳・右脳の機能と言語
- 第15回 : まとめ

●事前学習

予め指定された文献を読み、疑問点を整理して授業に参加する。
各回約2時間の事前学習を要する。

●事後学習

学習した言語現象を前期に学んだ認知操作の視点から考察する。
各回約2時間の事後学習を要する。

●成績評価

授業での発表(20%)、研究レポート(80%)
講評をお知らせ配信で伝えます。

●テキスト

- Corballis. P. M.(2003) ' Visuospatial processing and the right hemisphere interpreter, ' *Brain and Cognition* 53, 171 - 176, Elsevier.
- Gazzaniga, M. S.(2000) ' Cerebral specification and Interhemispheric communication - Does the corpus callosum enable the human condition ? *Brain* 123, 1293 - 1326, Oxford University Press. Oxford.
- 濱田英人(2016)『認知と言語－日本語の世界・英語の世界』開拓社, 東京
- Hind, John (1986) *Situation vs. Person Focus*. くろしお出版、東京
- 井川壽子(2012)『イベント意味論と日英語の構文』くろしお出版、東京

●参考書・参考資料等

授業の中で関連分野の文献について適宜指示する。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

15:00～毎週月曜日 16:00 濱田研究室

異文化コミュニケーション特論A (春学期/2単位) 御手洗 昭治

●テーマ

異文化接触・コミュニケーション・理解のパラダイムの探求

●授業概要

This course offers an introduction to Intercultural Communication. We will discuss key concepts in communication, culture and intercultural communication. Theories will be examined against a wide range of topics related to intercultural understanding and works done by a historian at Harvard and the former Ambassador to Japan under the Kennedy administration, Edwin O. Reischauer. Students are required to read English materials, too. 多文化が共存する今日のグローバル社会において、人類の共存と発展を追求する上で欠かせないのが、異文化のバックグラウンドを持つ者同士のコミュニケーションと言える。特論では、(1) エドワードT.ホルのコンセプトである「文化はコミュニケーションである。」=「コミュニケーションは文化である。」から始め、(2) 著名なハーバード大学の歴史学者でケネディ政権時代の駐日米国大使も務めたエドウィン・ライシャワーの異文化理解のコンセプトを基に、異文化理解不足から生じる文化摩擦、カルチャー・ショック、並びに異文化の紛争、その原因を探索し解決策も探してみる。(3) 異文化交流とは？異文化交渉とは？異文化エディエーションとは？について学際的アプローチ(文化人類学、心理学、社会学、宗教学、グローバル経営学、国際政治学の分野ビジネス分野を横断するアプローチ)で学考察し、それら3つのパラダイムも探求するなど取り扱う。(4) 世界の大学にみる異文化コミュニケーションと交渉教育と研究者についても英文資料も使い探してみる

●到達目標

グローバルな視野と地域共創力を身につけた異文化間の架け橋・異文化コミュニケーションター

●授業計画

- 第1回 「文化とは？各分野の『文化』のコンセプトと研究領域について探る」「文化の5つの要素・ペンタグラムとは？」
- 第2回 「コミュニケーション」の定義と研究領域について探る
- 第3回 「異文化コミュニケーション」の研究領域としての歴史を振り返る
- 第4回 「文化人類学者であったエドワード・T・ホル」を映像で紹介
- 第5回 「異文化接触とコミュニケーションと交流について考える」
- 第6回 「異文化コミュニケーションの文化摩擦の障害物について探ってみる」
- 第7回 「異文化・多文化研究とコミュニケーションと比較文化の楽しみ」
- 第8回 「各国の文化のお国自慢」
- 第9回 「クール・カルチャー」と「文化力を発信するには」
- 第10回 「言語と文化の記号圏について探る」
- 第11回 『異文化理解と国際理解』
- 第12回 『異文化理解を支えた人物像に迫る』
例：エドウィン・O・ライシャワー（ハーバード大学の歴史学者で駐日米国大使）の功績を振り返る。
『異文化の架け橋』のミディエーターについて探る
- 第13回 ケース・スタディ：「異文化の架け橋として教育・外交・異文化交流分野で貢献し活躍した、元駐日米国大使でハーバード名誉教授であったエドウィン・O・ライシャワーなどの異文化理解の理論・応用について探究する。」
- 第14回
- 第15回 総論（まとめ）

●事前学習

テキストの予習リーディング
各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

ノート・テーキングした授業内容と資料の再確認。リーディング・アサインメントに取り組むこと。
各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

平常点50%、予習のリーディング・アサインメントに基づくディスカッションの貢献度20%、エッセイ式レポートと研究成果の発表30% レポートについては、最終回に講評する。

●テキスト

御手洗昭治編著・小笠原はるの著『ライシャワーの名言から学ぶ異文化理解』：ゆまに書房,2016 ¥1,800

●参考書・参考資料等

御手洗昭治編著・小笠原はるの著『グローバル・異文化交流史』(明石書店) 2018年

●備考

授業の課題である資料 English Material (リーディング・アサインメントも含む) を事前に目を通し、翌週に課題から得た新しい発見事や感想などを発表してもらう。

●オフスアワー

水曜の9:30a.m.—10:30a.m.(メール等で事前のアポイントメントを取ることが望ましい。)

異文化コミュニケーション特論B (秋学期/2単位) 御手洗 昭治

●テーマ

異文化理解と異文化コミュニケーションの応用

●授業概要

Having learned concepts and theories of Intercultural Communication, we will get into a series of discussions and learn how to apply key concepts in communication, culture and intercultural communication settings and in real situations. Discussions will center around theories and concepts based on a well-known historian and a cross-cultural communicator, E.O.Reischauer's works, Students are required to read English materials, too. 秋学期では、春学期で取りあげた異文化コミュニケーションのコンセプトを基に、異文化理解に関しての応用についてライシャワー・モデルを参考にしてディスカッションを展開する。

●到達目標

グローバルな視野と地域共創力を身につけた異文化間の架け橋・異文化コミュニケーションター

●授業計画

- 第1回 春学期の研究成果の中間報告
- 第2回 「コミュニケーション」についての修士論文執筆内容の指導
- 第3回 「異文化理解についての」(修士論文執筆内容の指導)
- 第4回 「E・O・ライシャワーの人物像に迫る」& 修士論文執筆内容の指導
- 第5回 「E・O・ライシャワーの文学論と言葉について」& 修士論文執筆内容の指導
- 第6回 「E・O・ライシャワーの教育論」& 修士論文執筆内容の指導
- 第7回 「E・O・ライシャワーの思想」& 修士論文執筆内容の指導
- 第8回 「E・O・ライシャワーの国際社会論」& 修士論文中間発表会の準備
- 第9回 「E・O・ライシャワーの外交と交渉学」& 修士論文中間発表会の準備
- 第10回 修士論文中間発表会予行
- 第11回 中間発表会における問題点の整理
- 第12回 中間発表会における準備
- 第13回 中間発表資料へのアドバイス
- 第14回 中間発表資料のまとめ
- 第15回 中間発表資料提出

●事前学習

テキストの予習リーディング
各回約2時間の事前学習を要する。

●事後学習

ノート・テーキングした授業内容と資料の再確認。リーディング・アサインメントに取り組むこと。
各回約2時間の事後学習を要する。

●成績評価

平常点50%、予習のリーディング・アサインメントに基づくディスカッションの貢献度20%、エッセイ式レポートと研究成果の発表30% レポートについては、最終回に講評する。

●テキスト

御手洗昭治編著・小笠原はるの著『ライシャワーの名言から学ぶ異文化理解』：ゆまに書房,2016 ¥1,800

●参考書・参考資料等

御手洗昭治編著・小笠原はるの著『グローバル・異文化交流史』(明石書店) 2018年

●備考

授業の課題である資料 English Material (リーディング・アサインメントも含む) を事前に目を通し、翌週に課題から得た新しい発見事や感想などを発表してもらう。

●オフスアワー

水曜の9:30a.m.—10:30a.m.(メール等で事前のアポイントメントを取ることが望ましい。)

身体文化特論 A

(春学期 / 2 単位)

瀧元 誠樹

●テーマ

地域共創の担い手となるにあたり有益な思考力を身につける一つのテーマとして「劈かれるからだ」をとりあげ考察する。

●授業概要

竹内敏晴の『ことばが劈かれるとき』を主なテキストとし、受講者とともに輪読しながら、竹内の思想にふれながら「劈かれるからだ」について考察する。

演出家・教育者・思想家であった竹内敏晴氏が語られてきた「ことば」が、「竹内敏晴の『からだと思想』」というセレクションに編集され、2013年9月から2014年6月にかけて刊行された。哲学者である木田 元の言葉によれば、竹内のそれは『からだ』によって裏打ちされた『ことば』だという。戦前から戦後の動乱期、さらに学生運動や「アングラ」、東西冷戦の終結とバブル崩壊といった激動の社会変化の中で、私たちのからだはことばはどうなっていたのかを語る竹内の「ことば」に耳を澄ましてみたい。

●到達目標

竹内敏晴のいう「劈く」の概念を理解し、「劈かれるからだ」について自他の関係を身心の在り方から考察できるようになる。

●授業計画

- 第1回 竹内敏晴について
- 第2回 「ことばが劈かれる」とは何か
- 第3回 「ことばとの出会い」
- 第4回 「物語と音への目覚め」
- 第5回 「他者のまなざし」
- 第6回 「演技=行動するからだ」
- 第7回 「こえとの出会い」
- 第8回 「他者との出会い」
- 第9回 「ふれるということ」
- 第10回 「こえの治癒」
- 第11回 「現代社会とこえの歪み」
- 第12回 「からだを吟味する」
- 第13回 「からだとしてのことば」
- 第14回 「からだが劈かれる」とは何か
- 第15回 まとめ

●事前学習

テキストを読み、用語解説・要約・私見考察によるレジュメを作成して授業準備をする。

各回約3時間の事前学習を要する。

●事後学習

授業内容を振り返り、テキストや参考文献を読み、理解を深める。

各回約3時間の事後学習を要する。

●成績評価

平常点50%とレポート50% レポートの講評は最終回に行う。

●テキスト

竹内敏晴『ことばが劈かれるとき』ちくま文庫

●参考書・参考資料等

- *今野哲男『竹内敏晴』言視舎
- *竹内敏晴『思想するからだ』品文社

●備考

特記事項なし。

●オフスアワー

講義期間中の昼休み時間を基本とする。

身体文化特論 B

(秋学期 / 2 単位)

瀧元 誠樹

●テーマ

地域共創の担い手となるにあたり有益な思考力を身につける一つのテーマとして〈夜〉と〈人間〉をとりあげ考察する。

●授業概要

西谷 修の『夜の鼓動にふれる』を主なテキストとし、受講者とともに輪読しながら、戦争と人間について考察する。

「テロ」との戦争が標榜される現代社会において、この戦争が従来のもので違うところは、「主権」の認められない「国家」との戦争が目ざれているところにあるだろう。それは「非対称的戦争」とも言われている。というのも主権国家間による国家間秩序のなかで起きた「問題」を解決する手段として起きてきた「戦争」ではなく、国際社会の秩序になじまない「ならずもの」との戦いだからである。

では、主権国家間同士の戦争であれば、秩序的な戦いになるのかと言えばそのようなことはない。むしろ「戦争」は秩序や理性の振る舞いなどではなく、無秩序や非理性の発露する暴力の闇がうごめく世界である。その世界を西谷 修は「夜」と表現する。理性や意識のコントロールの効く世界に対して、というより「非対称的」なこととして非理性や無意識のはたらく「夜」の世界に触れてみたい。

●到達目標

西谷 修のいう「戦争」「否定」「夜」の概念を理解し、人間や人間関係について思想的考察ができるようになる。

●授業計画

- 第1回 西谷 修について
- 第2回 「世界戦争の時代」
- 第3回 「戦争の全体性」
- 第4回 「〈夜〉に目覚める」
- 第5回 「〈光〉の文明の成就」
- 第6回 「戦争の近代」
- 第7回 「世界戦争」
- 第8回 「ヘーゲルと戦争」
- 第9回 「露呈する〈無〉」
- 第10回 「〈世界〉の崩壊」
- 第11回 「〈未知〉との遭遇」
- 第12回 「アポカリプス以後」
- 第13回 「テロとの戦争について」
- 第14回 「夜の鼓動に触れる」
- 第15回 まとめ

●事前学習

テキストを読み、用語解説・要約・私見考察によるレジュメを作成して授業準備をする。

各回約3時間の事前学習を要する。

●事後学習

授業内容を振り返り、テキストや参考文献を読み、理解を深める。

各回約3時間の事後学習を要する。

●成績評価

平常点50%とレポート50% レポートの講評は最終回に行う。

●テキスト

西谷 修『夜の鼓動に触れる』ちくま学芸文庫

●参考書・参考資料等

- *西谷 修『戦争論』講談社学術文庫
- *西谷 修『理性の探究』岩波書店

●備考

特記事項なし。

●オフスアワー

講義期間中の昼休み時間を基本とする。

図像学特論A

(春学期 / 2 単位)

浅川 泰

●テーマ

イメージへの旅・記号への旅 I

地域共創の担い手となるにあたり、今日のイメージ＝メディアの多様な展開に対応する思考力を養うことをテーマとして「イメージ・記号・シンボル」をとりあげて学習する。

●授業概要

今日のイメージの時代を先取りするかのようにイメージ研究の方法を美術史の分野で開拓したのは、美術史家アビ・ヴァールブルクであった。アーウィン・パノフスキーが「人文科学の各分野が、互いに他の分野の侍女として仕えるのではなく、共通の場で出会う」シンボル（文化的徴候）学として発展させたことはよく知られている。

このシンボル学は、20世紀の文化研究の新たな方法として生まれたのであるが、その代表的成果が哲学者エルンスト・カッシーラーの言語や思考のシンボル形式の探究であり、また精神医学者ジークムント・フロイトの夢理論、言語哲学者フェルディナント・ド・ソシュールが示唆した一般記号研究もシンボル学としてみることでできるだろう。

本授業では、イメージ＝メディア（文学、美術、写真、映画、マンガ、アニメーション、身体表現、神話・ファンタジー、儀礼・モード、身体表現等）の分析や解釈について理解をふかめるため、イメージ・シンボル・記号の機能や意味について学習する。

●到達目標

記号・シンボル・イメージについての基本的な理解。

●授業計画

「人はイメージから何を学び、イメージは人に何をもちたすのか」。コトバやイメージ、記号に関するテキスト・映像を読み・見ながら、記号・シンボル・イメージについての基礎的な学習をする。

- 第1回 序 初めにイメージありき。
- 第2回 記号・シンボル・イメージ
- 第3回 コトバとイメージ① 文化のかたち
- 第4回 コトバとイメージ② シンボル化
- 第5回 シンボルとアイコン
- 第6回 イメージと無意識① シンボルの探究
- 第7回 イメージと無意識② 夢・幻想・神話
- 第8回 記号（シーニュ）とは
- 第9回 記号論の視点から①——伝達と意味作用
- 第10回 記号論の視点から②——イメージと非記号
- 第11回 記号論の視点から③——意味生成
- 第12回 イメージ＝コトバ＝身体①——身体とシンボル化
- 第13回 イメージ＝コトバ＝身体②——身体のコトバ
- 第14回 イメージ＝メディア＝身体①——身体とイメージ
- 第15回 イメージ＝メディア＝身体②——メディアとしての身体（各回のテーマ・授業の流れはおおよそのもの）

●事前学習

使用するテキスト（事前に配布、あるいは入手した）を読むこと。関連した映像を見ること。各回1時間程度の事前学習を要する。

●事後学習

配布したプリント類の整理及び授業内容の確認。各回30分～1時間程度の事後学習を要する。

●成績評価

平常点50%とレポート50%。レポートの講評は最終回に行う。

●テキスト

参考文献等の中から各自が選択して活用すること。基本的にはプリント及び論文等のコピー（一部）をもって代える。

●参考書・参考資料等

- *丸山圭三郎『言葉とは何か』ちくま学芸文庫 2008
- *河合隼雄『イメージの心理学』青土社 1991
- *丸山圭三郎『言葉と無意識』講談社現代新書 1987
- *池上嘉彦『記号論への招待』岩波新書 1984
- *M.メルロ＝ポンティ「表現としての身体と言葉」『メルロ＝ポンティ・コレクション』（中山 元編訳）ちくま学芸文庫 1999
- *K.ル＝グウィン「語ることは耳傾けること」（青木由紀子訳）『ファンタジーと言葉』岩波現代文庫 2015
- *市川浩「現象としての身体」『構造としての身体』講談社学術文庫 1992
- *ハンス・ベルティンク「イメージ＝メディア＝身体」『イメージ人類学』（仲間裕子訳）平凡社 2014
- *A.ルロワ＝グーラン『身ぶりと言葉』（荒木亨訳）ちくま学芸文庫 2012
- *山口昌男・中村雄二郎『知の旅への誘い』岩波新書 1981

●備考

特になし。

●オフスアワー

講義終了後、1号館3階の非常勤講師室にて対応する。（約1時間程度）

図像学特論B

(秋学期 / 2 単位)

浅川 泰

●テーマ

イメージへの旅・記号への旅 II

●授業概要

イメージや映像の領域に光をあてるイメージ研究は、精神分析や構造分析、記号論、メディア論などの新たな科学によっても進展した。

イメージ・シンボル・記号をめぐる探究は、美術や文学ばかりでなく、映画、マンガ・アニメーション、身体表現、モードや儀礼などの研究分野でも大きな位置を占めるようになった。というより、それらの分野を横断し、結びつけた。イメージ（記号・シンボル）研究は、そうした横断性・敷居性を特色とする。

本授業では、イメージ・シンボル・記号の機能や意味についての学習をふまえて、受講者の研究テーマや関心をもとに、イメージの分析や解釈について、その方法論について理解をふかめることを主な内容とする。

●到達目標

イメージの解釈・分析の方法論についての基本的な理解。

●授業計画

イメージ＝メディア（文学、美術、写真、映画、マンガ、アニメーション、身体表現、神話・ファンタジー、儀礼・モード、身体表現等）の分析及び解釈の具体例（テキスト・画像・映像）。

色や音、かたちのイメージとメタファー、シンボルとの関係、そうした視点からの解釈や分析の方法論についての理解に重点を置く。

- 第1回 詩学 コトバからイメージへ
 - 第2回 イメージの詩学（ポエジーと神話）
 - 第3回 色彩・音・かたち①——イメージとメタファー
 - 第4回 色彩・音・かたち②——イメージとセンス（意味）
 - 第5回 文化記号学①——イメージと文化
 - 第6回 文化記号学②——コトバと文化
 - 第7回 イメージと人類学・考古学
 - 第8回 イメージ人類学①——図像の文化誌
 - 第9回 イメージ人類学②——神話・イメージの考古学
 - 第10回 神話・ファンタジー① 鑑賞と考察
 - 第11回 神話・ファンタジー② ディスカッション
 - 第12回 絵本・アニメーション① 鑑賞と考察
 - 第13回 絵本・アニメーション② ディスカッション
 - 第14回 文学・映画・絵画① 鑑賞と考察
 - 第15回 文学・映画・絵画② ディスカッション
- （各回のテーマ・授業の流れはおおよそのもの。画像や映像を使用し、受講者の関心度によって、テーマ・内容を変え、授業をすすめる）

●事前学習

使用するテキスト（事前に配布、あるいは入手した）を読むこと。各回1時間程度の事前学習を要する。

●事後学習

配布したプリント類の整理及び授業内容の確認。各回30分～1時間程度の事後学習を要する。

●成績評価

平常点50%とレポート50%。レポートの講評は最終回に行う。

●テキスト

基本的にはプリント及び論文等のコピー（一部）をもって代える。

●参考書・参考資料等

- *ロマン・ヤコブソン「言語学と詩学」『ヤコブソン・セレクション』（桑野隆・朝妻恵里子編訳）平凡社ライブラリー 2015
 - *中沢新一『野性の思考 レヴィ＝ストロース』（NHK 100分 de 名著）2016
 - *山口昌男「文化記号論研究における〈異化〉の概念」『山口昌男コレクション』（今福龍太＝編）ちくま学芸文庫 2013
 - *河合隼雄『神話と日本人の心』河合俊雄編 岩波現代文庫 2016
 - *知里幸恵（編訳）『アイヌ神話集』岩波文庫 1978
 - *K.ル＝グウィン「SFにおける神話と原型」『夜の言葉』（山田和子他訳）岩波書店 1992
 - *中村雄二郎「バリ島のコスモロジー」『魔女ランダ考』岩波書店 1983
 - *蓮實重彦「横たわる漱石」『夏目漱石論』講談社学芸文庫 2012
 - *ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン「細部という問題、面という問題」『イメージの前で』（江澤健一郎訳）法政大学出版局 2012
 - *「挿絵が僕らにくれたもの—通俗文化の源流—」展図録（三鷹の森ジブリ美術館）2012
 - *内田 樹『映画の構造分析』文春文庫 2011
 - *ラスコー展図録（編集：国立科学博物館、毎日新聞、TBSテレビ）2016
 - *Margolin (jean-claude) 《Une phénoménologie de L'imaginaire》BACHELARD, écrivains detoujours/seuil 1974
- 備考
特になし。
- オフスアワー
講義終了後、1号館3階の非常勤講師室にて対応する。（約1時間程度）

日本文学特論Ⅱ A

(春学期 / 2 単位)

田中 幹子

●テーマ

●テーマ

国際的に評価されている日本文学の代表である源氏物語を学ぶことで国際社会に通用する視野をもつことを目指す。

●授業概要

源氏物語の各巻の内容を把握した上で、その巻の核となる歌を取り出し分析する。

●到達目標

源氏物語の主要な場面での和歌をじっくり分析することで新たな読解を試みる。

●授業計画

- 第1回 『源氏物語』について概論
- 第2回 桐壺巻 更衣の和歌・桐壺帝の和歌
- 第3回 若紫巻 光源氏の和歌・尼君の和歌
- 第4回 紅葉賀巻 光源氏の和歌・藤壺の和歌
- 第5回 花宴巻 光源氏の和歌・朧月夜の和歌
- 第6回 葵巻 光源氏の和歌・若紫の和歌
- 第7回 賢木巻 光源氏の和歌・六条御息所の和歌
- 第8回 須磨巻 光源氏の和歌・紫の上の和歌・藤壺の和歌
- 第9回 明石巻 光源氏の和歌・明石の上の和歌
- 第10回 滯標巻 光源氏の和歌・朱雀帝の和歌
- 第11回 松風巻 光源氏の和歌・冷泉帝の和歌
- 第12回 薄曇巻 光源氏の和歌・明石君の和歌
- 第13回 絵合巻 光源氏の和歌・秋好中宮の和歌
- 第14回 源氏物語の今後の展開
- 第15回 源氏物語の今後の展開と総括

●事前学習

毎回、その時の和歌について事前に調べ、資料をつくる。
各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

学んだことをA4一枚にまとめ、理解したかを確認する。
各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

テストを60%、発表の資料作成、プレゼンを40%
テストを返却して復習する。

●テキスト

必要箇所はコピー配付する。

●参考書・参考資料等

新編 日本古典文学全集 (源氏物語 1・2)

●備考

特になし。

●オフィスアワー

木曜日昼休み 於研究室

日本文学特論Ⅱ B

(秋学期 / 2 単位)

田中 幹子

●テーマ

京都を中心とした日本古典文学を学ぶことで比較対象として地域を意識する。

●授業概要

『竹取物語』『伊勢物語』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』の概要を把握する。

●到達目標

平安時代の社会制度・政治体制・風俗・儀礼を作品から学ぶ。

●授業計画

- 第1回 平安社会の知識を深める (歴史 794 年～900 年)
- 第2回 平安社会の知識を深める (歴史 900 年～1000 年)
- 第3回 平安社会の結婚 『竹取物語』からみる身分階級
- 第4回 平安社会の結婚 『竹取物語』からみる妻問い婚
- 第5回 平安社会の結婚 『竹取物語』からみる入内
- 第6回 平安時代の恋愛 『伊勢物語』からみる元服
- 第7回 平安時代の恋愛 『伊勢物語』からみる摂関政治
- 第8回 平安時代の恋愛 『伊勢物語』からみる齋宮
- 第9回 平安時代の政治 『蜻蛉日記』からみる藤原氏の権力
- 第10回 平安時代の政治 『蜻蛉日記』からみる一夫多妻制
- 第11回 平安時代の政治 『蜻蛉日記』からみる出家
- 第12回 平安時代の文化 『和泉式部日記』からみる公卿の生活
- 第13回 平安時代の文化 『和泉式部日記』からみる召人
- 第14回 平安時代の文化 『和泉式部日記』からみる女房
- 第15回 平安文化のまとめ

●事前学習

各物語の内容をあらかじめ理解し、人間関係を把握すること。
各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

学んだことをA4一枚にまとめ、理解したかを確認する。
各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

各作品に対してテストを60%、発表の資料作成、プレゼンを40%
テストを返却して復習する。

●テキスト

作品の取り上げる部分をコピー配付。

●参考書・参考資料等

新編 日本古典文学全集 (竹取物語・伊勢物語) (蜻蛉日記)

●備考

特になし。

●オフィスアワー

木曜日昼休み 於研究室

日本文学特論Ⅲ A

(春学期 / 2 単位)

荒木 奈美

●テーマ

文学教育の可能性を通じて、地域共創に資する新しい国語教育のあり方を考える

●授業概要

- 1 身体知をキーワードにした諸学分野の知見から、文学教育の可能性を広げる。
- 2 文学と、学習者の実体験及び実社会との関連性を模索する中で、実学としての国語教育を問い直す。
- 3 学校教育における実践を意識した教育活動例を積み重ねる。

●到達目標

教師と学習者が身体共鳴を通してともに学び合える国語教育のあり方と可能性を実感として掴む。

●授業計画

- 第1回 インTRODクシヨ(文学教育における身体知の可能性)
- 第2回 海外における文学教育より(1) イギリス
- 第3回 海外における文学教育より(2) アメリカ
- 第4回 海外における文学教育より(3) ノルウェー
- 第5回 海外における文学教育より(4) カナダ
- 第6回 日本の文学教育史に先進的な取り組みを探す(1) 大正期
- 第7回 日本の文学教育史に先進的な取り組みを探す(2) 戦後期
- 第8回 日本の文学教育史に先進的な取り組みを探す(3) 高度成長期
- 第9回 日本の文学教育史に先進的な取り組みを探す(4) 現代
- 第10回 身体知を生かして文学をどう読むか
- 第11回 五感との関連から
- 第12回 朗読を取り入れた授業
- 第13回 演劇を取り入れた授業
- 第14回 ダンスを取り入れた授業
- 第15回 まとめ 文学教育の可能性を具体化する

●事前学習

次週扱う作品を読み、読書レポートを書いてくる。
各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

授業を通して考えたことなどを授業レポートとしてまとめておく。
各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

毎回の授業で課すミニレポート6割、およびまとめの回に課す口頭発表4割を合わせた総合評価とする。また成績評価は、第15回に授業内で課す毎回の感想レポートを束ねたポートフォリオの返却と合わせ、口頭にて行う。

●テキスト

授業ごとに指示する。

●参考書・参考資料等

参加者の話し合いの内容に応じて、参考資料を授業ごとに準備・配布する。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

毎週火曜日-木曜日 12:30-12:50 (要事前連絡)

日本文学特論Ⅲ B

(秋学期 / 2 単位)

荒木 奈美

●テーマ

文学教育の可能性を通じて、地域共創に資する新しい国語教育のあり方を考える

●授業概要

- 1 ⅢAの授業を通して得られた文学教育の新しい可能性を踏まえた教材研究に取り組む
- 2 ⅢAの授業で実感として掴んだ新しい国語教育のあり方と可能性をもとに、実際に教育現場で活動するための諸問題について考える

●到達目標

教師と学習者が身体共鳴を通じてともに学び合える国語教育のあり方と可能性を具体化し、実際の教育現場に働きかける

●授業計画

- 第1回 インTRODクシヨ(ⅢAで得た知見の確認とその実現可能性について)
- 第2回 高校国語における発展的な文学教材研究(1) 芥川龍之介『羅生門』
- 第3回 高校国語における発展的な文学教材研究(2) 中島 敦『山月記』
- 第4回 高校国語における発展的な文学教材研究(3) 鷲田清一の評論
- 第5回 高校国語における発展的な文学教材研究(4) 内田 樹の評論
- 第6回 高校国語における発展的な文学教材研究(5) 現代散文詩
- 第7回 国語教育における発展的な言語活動の研究(1) 朗読を中心とした授業
- 第8回 国語教育における発展的な言語活動の研究(2) スピーチを取り入れた授業
- 第9回 国語教育における発展的な言語活動の研究(3) インタビューを取り入れた授業
- 第10回 国語教育における発展的な言語活動の研究(4) クリエイティブ・ライティングを取り入れた授業
- 第11回 国語教育における発展的な言語活動の研究(5) 古典授業をアクティヴにする工夫
- 第12回 受講生の模擬授業(1) 小説を中心に
- 第13回 受講生の模擬授業(2) 評論作品を中心に
- 第14回 受講生の模擬授業(3) 古典作品を中心に
- 第15回 まとめ 新しい文学教育をどう評価するか

●事前学習

次週扱う作品を読み、読書レポートを書いてくる。
各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

授業を通して考えたことなどを授業レポートとしてまとめておく。
各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

毎回の授業で課すミニレポート6割、およびまとめの回に課す口頭発表4割を合わせた総合評価とする。また成績評価は、第15回に授業内で課す毎回の感想レポートを束ねたポートフォリオの返却と合わせ、口頭にて行う。

●テキスト

授業ごとに指示する。

●参考書・参考資料等

参加者の話し合いの内容に応じて、参考資料を授業ごとに準備・配布する。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

毎週火曜日-木曜日 12:30-12:50 (要事前連絡)

日本語特論 A

(春学期 / 2 単位)
渡辺 さゆり

●テーマ

日本近世のくずし字資料を読み、日本語の歴史について理解を深め、地域共創に役立つ知識を身につける。

●授業概要

江戸時代の国学者・本居春庭の『詞八衢』を読む。勉誠社出版の影印本をテキストとして使用するが、内容はくずし字で記載されているので、くずし字を読解する力も必要である。

『詞八衢』は動詞の活用について解説したものであり、五十音図の各行ごとに活用表を掲げ、さらに必要な語について古典作品における証例（使用例）を掲げ説明が施されている。

本講義ではくずし字で書かれた『詞八衢』の序文と跋文を読み、春庭に人となり『詞八衢』の概要について学習する。

●到達目標

くずし字で書かれた近世文献を読み解いた上で、近世動詞研究の成果を理解する。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 本居宣長の動詞研究について
- 第3回 本居春庭について
- 第4回 春庭の教育環境
- 第5回 くずし字資料の読み方
- 第6回 『詞八衢』について
- 第7回 『詞八衢』序文を読む（いにしへまなび）
- 第8回 『詞八衢』序文を読む（五十連のこゑ）
- 第9回 『詞八衢』序文を読む（てにをは・かなづかい）
- 第10回 『詞八衢』序文を読む（詞のはたらき）
- 第11回 『詞八衢』序文を読む（鈴屋大人）
- 第12回 『詞八衢』序文を読む（植松有信）
- 第13回 『詞八衢』跋文を読む（本居太平）
- 第14回 『詞八衢』跋文を読む（春庭の想い）
- 第15回 まとめ

●事前学習

指定された箇所について、くずし字で書かれた文字の字母を明らかにしたあと、内容を読み解くこと。

各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

授業で読んだ『詞八衢』の内容について理解すること。

各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

授業での発表・発言内容、平常点で総合的に評価する。最終回に講評を行う。

●テキスト

授業で指示する。

●参考書・参考資料等

授業で指示する。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

講義終了後、7502 研究室にて対応します。(30 分程度)

日本語特論 B

(秋学期 / 2 単位)
渡辺 さゆり

●テーマ

『詞八衢』の活用研究について学び、日本語の歴史について理解を深め、地域共創に役立つ知識を身につける。

●授業概要

江戸時代の国学者・本居春庭の『詞八衢』を読む。勉誠社出版の影印本をテキストとするが、くずし字で記載されているので、くずし字を読解する力も必要である。

『詞八衢』は動詞の活用について解説したものであり、五十音図の各行ごとに活用表を掲げ、さらに必要な語について古典作品における証例（使用例）を掲げ説明が施されている。

本講義では『詞八衢』で著述された動詞の活用、活用の種類、接続する助詞・助動詞などについて学習し、本居春庭の文法論について考える。

●到達目標

くずし字で書かれた近世文献を読み解いた上で、『詞八衢』に記載された活用の種類と関連する「てにをは」について習得し、近世の文法論について理解を深める。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 『詞八衢』と活用について
- 第3回 「四段の活の図」
- 第4回 「四段の活」
- 第5回 「一段の活」
- 第6回 「中二段の活」
- 第7回 「下二段の活」
- 第8回 「受てにをは」
- 第9回 「續く詞」
- 第10回 「下知の詞」
- 第11回 「活詞」と「體言」
- 第12回 「第一の音」「第二の音」
- 第13回 「第三の音」
- 第14回 「第四の音」
- 第15回 まとめ

●事前学習

くずし字で書かれた『詞八衢』を読み、内容を理解してくること。

各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

『詞八衢』で著述された動詞論を理解すること。

各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

授業での発表・発言内容、平常点で総合的に評価する。最終回に講評を行う。

●テキスト

授業で指示する。

●参考書・参考資料等

授業で指示する。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

講義終了後、7502 研究室にて対応します。(30 分程度)

日本史特論 A

(春学期 / 2 単位)
横島 公司

●テーマ

日本近現代の戦争をめぐる諸相
—日本の近現代史に対する理解を深めることで、地域共創に役立つ教養を身につける。

●授業概要

戦争とはなにか？この問いに答えるのは容易なことではないが、歴史を学ぶことで、我々は先人の歩みを知ることができる。日本が誤った道を進むことのないよう、過去に目をむけ対話することが歴史を学ぶことの本質的な意義である。

以上の認識にたち、本講義ではまず人類社会が進んできた戦争抑止に対する様々な試みを学び、そのうえで 19 世紀以降に生まれた「戦争責任」という概念を軸として、戦前日本の戦争という観点について多面的に考察していく。

●到達目標

戦争犯罪と戦争犯罪の形成過程および観念について、歴史的な起源と日本とのかかわりという観点から理解を深める。併せて、歴史学の理論（研究手法、視角、問題意識）に対する理解も深化させる。

●授業計画

- 第 1 回 はじめに—今後の日本の進路を考える視点
- 第 2 回 戦争犯罪の形成(1) —野蛮な戦争
- 第 3 回 戦争犯罪の形成(2) —戦争の“ルール”化
- 第 4 回 戦争犯罪の形成(3) —捕虜と救護、赤十字精神
- 第 5 回 戦争犯罪の形成(4) —第一次世界大戦と通例の戦争犯罪
- 第 6 回 人道に対する罪(1) —ニュルンベルク人種法とゲッター
- 第 7 回 人道に対する罪(2) —ユダヤ絶滅政策とホロコースト
- 第 8 回 いわゆる「戦犯」とはなにか
- 第 9 回 あいつぐ事変と戦争
- 第 10 回 宣戦布告なき戦争
- 第 11 回 戦争責任とはなにか(1) —開戦責任と敗戦責任
- 第 12 回 戦争責任とはなにか(2) —通例の戦争犯罪と A 級戦犯
- 第 13 回 731 部隊と毒ガス戦
- 第 14 回 靖国問題……靖国神社とはなにか
- 第 15 回 むすび—戦後処理と国民の意識

●事前学習

本講義では、歴史資料（英文含む）の読解、研究報告、議論も適時行っていく。そのため履修者は指定された発表に対する準備を怠ることなく講義に臨んでほしい。そのため各自、常に参考文献を活用しながらの予習を心がけること。

各回約 3 時間の事前学習を要する。

●事後学習

受講者は、講義や議論内容をしっかり理解しながら、それぞれの課題の解決に努めて欲しい。そのうえで、未解決の課題について積極的な質問（意思表示）ができるよう、準備するよう心掛けること。

各回約 2 時間の事後学習を要する。

●成績評価

期末試験・レポート 50%、平常点 50%、計 100%とする。試験・レポート、授業への貢献度に対する傾向や講評は、適時公表します。

●テキスト

- ・粟屋憲太郎『東京裁判への道』（岩波現代新書、2013 年）
- ・伊香俊哉『満州事変から日中全面戦争へ』（戦争の日本史 22）（吉川弘文館、2007 年）

●参考書・参考資料等

- ・粟屋憲太郎『東京裁判への道』（岩波現代新書、2013 年）

●備考

講義ではあるが、教員からの一方通行にならないように、応答を重視するので、積極的に参加する意識をもって履修してもらいたい。

●オフスアワー

講義終了後、教室にて次講義の開始時刻まで対応（時間、内容については適時、相談ください）。

日本史特論 B

(秋学期 / 2 単位)
横島 公司

●テーマ

日本現代史と東京裁判

●授業概要

本講義では極東国際軍事裁判（東京裁判）をめぐる国際関係における（あるいは日本国内の）相克を軸として、戦前戦後の日本における政治と戦争をめぐる諸問題について考えていく。また現代の視点として、日本の安全保障に関わる問題に比重を置き、日米安保の展開、自衛権、憲法問題等、グローバリゼーションへの対応についても考えていく。

また本講義では、東京裁判を多面的に捉えるため、日本側史料だけでなく、煉獄国側の史料（GHQ 文書、SCAP 文書、IPS 尋問調査など）についても購読（翻訳）しながら、議論も適時おこなっていく。

●到達目標

戦前戦後の日本の歩みについて、より多角的に理解を深めながら受講生が、戦後の日本が進んできた道のりへの理解を深め、今後の日本の進路についての自分なりの観点をもてるようにする。

●授業計画

- 第 1 回 オリエンテーション
- 第 2 回 日本敗戦—戦犯逮捕と占領政策
- 第 3 回 東京裁判の諸相(1) —あいつぐ戦犯逮捕
- 第 4 回 東京裁判の諸相(2) —IPS 尋問調査と戦犯容疑者たちの諸相
- 第 5 回 東京裁判の諸相(3) —国家弁護と個人弁護
- 第 6 回 戦争責任をめぐる諸相(1) —日本とドイツ
- 第 7 回 戦争責任をめぐる諸相(2) —BC 級戦犯裁判と継続裁判
- 第 8 回 戦争責任をめぐる諸相(3) —日本の国家賠償とドイツの個人補償
- 第 9 回 戦後補償と戦没者顕彰—靖国神社と慰霊、追悼
- 第 10 回 靖国問題—いわゆる A 級戦犯合祀問題
- 第 11 回 現代の課題(1) —PKO と国際貢献の相克
- 第 12 回 現代の課題(2) —GHQ 憲法という神話
- 第 13 回 現代の課題(3) —基地問題と領土問題
- 第 14 回 現代の課題(4) —PKO と国際貢献の相克
- 第 15 回 むすび

●事前学習

本講義では、歴史資料（英文含む）の読解、研究報告、議論も適時行っていく。そのため履修者は指定された発表に対する準備を怠ることなく講義に臨んでほしい。そのため各自、常に参考文献を活用しながらの予習を心がけること。

各回約 3 時間の事前学習を要する。

●事後学習

受講者は、講義や議論内容をしっかり理解しながら、それぞれの課題の解決に努めて欲しい。そのうえで、未解決の課題について積極的な質問（意思表示）ができるよう、準備するよう心掛けること。

各回約 2 時間の事後学習を要する。

●成績評価

期末試験・レポート 50%、平常点 50%、計 100%とする。試験・レポート、授業への貢献度に対する傾向や講評は、適時公表します。

●テキスト

- ・粟屋憲太郎『東京裁判への道』（岩波現代新書、2013 年）
- ・伊香俊哉『満州事変から日中全面戦争へ』（戦争の日本史 22）（吉川弘文館、2007 年）

●参考書・参考資料等

- ・豊下楯彦『昭和天皇・マッカーサー会見』（岩波現代新書 2008 年）
- ・朝日新聞取材班『戦争責任と追悼—歴史と向き合う(1)』（朝日新聞社 2006 年）
- ・朝日新聞取材班『「過去の克服」と愛国心—歴史と向き合う(2)』（朝日新聞社 2007 年）

●備考

講義ではあるが、教員からの一方通行にならないように、応答を重視するので、積極的に参加する意識をもって履修してもらいたい。

●オフスアワー

講義終了後、教室にて次講義の開始時刻まで対応（時間、内容については適時、相談ください）。

北方文化特論Ⅱ A

(春学期 / 2 単位)

本田 優子

●テーマ

北海道における地域共創力の柱の一つであるアイヌ文化について理解し、地域文化の発展に寄与する力をつける。

●授業概要

アイヌ文化については、近年、学校教育でも取り上げられつつあるが、それでもなお、概論的なものにすぎない。

この授業では、アイヌの世界観について体系的にまとめられている、中川 裕『語り合うことばのカーカムイたちと生きる世界―』をテキストとして講読することにより、アイヌ文化全般についての理解を深めていく。その際、伝統的アイヌ社会と現代のアイヌ社会とを区別して理解することの重要性も認識するように留意する。

●到達目標

1. アイヌ文化の基本となるカムイの概念、および宇宙観について理解する。
2. アイヌの伝統的社会的姿を理解する。
3. 現代のアイヌ社会の状況について理解する。

●授業計画

『語り合うことばのカーカムイたちと生きる世界―』を講読する。毎回レポーターがレジュメを作成し、内容を報告するとともに重要な論点について議論する。

第1回 はじめに

第2回 第1章 1節 水のせせらぎ、鳥の羽音、はげる炎

第3回 第1章 2節 「祈り」によって語りかける

第4回 第1章 3節 カムイとのかけひき

第5回 第1章 4節 誰の中にも憑神が住んでいる

第6回 第2章 1節 広い大地で人と出会う

第7回 第2章 2節 死者たちと語り合うとき

第8回 第2章 3節 争いを避け、ことばを戦わす

第9回 第3章 1節 メロディにあふれた生活

第10回 第3章 2節 カムイが語る「ものがたり」

第11回 第3章 3節 語り継がれる思想と論理

第12回 第3章 4節 時間と空間を超えて戦う超人たち

第13回 第4章 1節 誰の口から語るか

第14回 前半部のまとめ

第15回 後半部のまとめ

●事前学習

- ・レポーターは自分の担当分のレジュメを作成し、論点を考えておく。基本理解ができているかどうか確認するための質問を3つ考えておく。
- ・レポーター以外の受講生は、当該部分を精読し疑問点および議論したい点について考えておく。各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

議論した点についてまとめておく。3つの質問にきちんと答えられるように理解を深め整理しておく。各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

レポート70%、平常点30%、計100%とする。レポートについては、次週講評する。

●テキスト

中川 裕『語り合うことばのカーカムイたちと生きる世界―』：岩波書店、2010

●参考書・参考資料等

特になし。

●備考

テキストは各自購入すること。

●オフスアワー

講義終了後、本田研究室（中央棟 7508）にて対応。（30分程度）

北方文化特論Ⅱ B

(秋学期 / 2 単位)

本田 優子

●テーマ

アイヌ文化に関する基礎知識の習得

●授業概要

アイヌ文化については、近年、学校教育でも取り上げられつつあるが、それでもなお、概論的なものにすぎない。

この授業では、アイヌの世界観について体系的にまとめられている、中川 裕『語り合うことばのカーカムイたちと生きる世界―』をテキストとして講読することにより、アイヌ文化全般についての理解を深めていく。その際、伝統的アイヌ社会と現代のアイヌ社会とを区別して理解することの重要性も認識するように留意する。

秋学期の本授業では、テキスト第4章以降および、新テキストである箕島栄紀『アイヌ史を問いなおす』を講読する。さらに、特に重要な分野について映像記録による学習をおこなう。

●到達目標

1. アイヌ文化の基本となるカムイの概念、および宇宙観について理解する。
2. アイヌの伝統的社会的姿を理解する。
3. 現代のアイヌ社会の状況について理解する。

●授業計画

『語り合うことばのカーカムイたちと生きる世界―』を講読する。毎回レポーターがレジュメを作成し、内容を報告するとともに重要な論点について議論する。

第1回 第4章 2節 男の語ることば、女の語ることば

第2回 第4章 3節 幸も不幸も名前で届く

第3回 第4章 4節 地名から伝わるその土地の姿

第4回 おわりに

第5回 まとめ

第6回 『アイヌ史を問いなおす』序

第7回 「アイヌ史における新たなパースペクティブ」

第8回 「“アイヌ史的近世”をめぐって」

第9回 「厚真の遺跡を支えたもの」

第10回 「環オホーツク海域の超遠距離交易」

第11回 「北海道太平洋側内陸部におけるシカ皮・ワシ羽の生産・流通と生態系」

第12回 「東アジアにおけるクロテンの皮衣」

第13回 「アムール川流域の資源と先住民族の経済」

第14回 「ビーバーの尻尾とヘラジカの皮」

第15回 全体のまとめ

●事前学習

- ・レポーターは自分の担当分のレジュメを作成し、論点を考えておく。基本理解ができているかどうか確認するための質問を3つ考えておく。
- ・レポーター以外の受講生は、当該部分を精読し疑問点および議論したい点について考えておく。各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

議論した点についてまとめておく。3つの質問にきちんと答えられるように理解を深め整理しておく。各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

レポート70%、平常点30%、計100%とする。レポートについては、次週講評する。

●テキスト

・中川 裕『語り合うことばのカーカムイたちと生きる世界―』：岩波書店、2010

・箕島栄紀『アイヌ史を問いなおす』勉誠出版、2011

●参考書・参考資料等

特になし。

●備考

テキストは各自購入すること。

●オフスアワー

講義終了後、本田研究室（中央棟 7508）にて対応。（30分程度）

北方文化史特論 A

(春学期 / 2 単位)

川上 淳

●テーマ

地域共創力を歴史的思考から理解し、古代北方史を研究する。

●授業概要

北方古代史について、最新の研究成果による論文・著書を講読し討論する。具体的には北海道・東北地方・東部ユーラシアの「北の財」の実態と、歴史的・文化的意義を最新の古代史・考古学研究の成果から実証的に検討する。

●到達目標

歴史研究の基礎を修得する。

史料批判など、史料の扱いと歴史研究方法を身につける。

●授業計画

- 第1回 「もの」研究の潮流
- 第2回 古代北方の交易・交流
- 第3回 朝貢システム
- 第4回 古代北方とサハリン
- 第5回 古代北方とユーラシア
- 第6回 平安貴族とクロテン
- 第7回 中国のクロテン
- 第8回 古代の鹿革と鷲羽
- 第9回 鹿革の受容
- 第10回 鷲羽交易
- 第11回 肅慎考
- 第12回 鷲羽と肅慎
- 第13回 昆布と北方社会
- 第14回 昆布交易と三十八年戦争
- 第15回 交易の古代史

●事前学習

毎回、テキストを十分に読みこなし、特に発表者は他文献も準備して、発表レジュメを作る。

各回約2時間の事前学習を要する。

●事後学習

再度、発表者の配布資料などとテキストを復習する。

各回約2時間の事後学習を要する。

●成績評価

発表内容や討論における発表頻度その他によって評価する。フィードバックとして最終回に講評する。

●テキスト

簗島栄紀『「もの」と交易の古代北方史』(晩成出版、2015)

●参考書・参考資料等

特になし。

●備考

特になし。

●オフスアワー

金曜日 12:10~13:00

北方文化史特論 B

(秋学期 / 2 単位)

川上 淳

●テーマ

地域共創力を歴史的思考から理解し、中近世蝦夷地の北方交易の研究を研究する。

●授業概要

未解明であった中近世の蝦夷地の人びととその社会について、考古学と文献史学の双方から検討する。北海道・樺太・千島へ和人はいつどのようなかたちで進出したか、和人や日本製品の進出がアイヌ文化の形成と変容に与えた影響などを検討する。

●到達目標

歴史研究の基礎を修得する。

史料批判など、史料の扱いと歴史研究方法を身につける

●授業計画

- 第1回 北方史とアイヌ文化
- 第2回 北日本出土の鍋
- 第3回 宝物とツクナイ
- 第4回 本州アイヌの実像
- 第5回 生業と習俗
- 第6回 狩猟と漁労
- 第7回 和人の北方進出
- 第8回 北海道の中世陶磁器
- 第9回 北海道の近世陶磁器
- 第10回 北海道石造物
- 第11回 樺太出土の日本製品
- 第12回 シラヌシ会所
- 第13回 クシュンコタンとアイヌ
- 第14回 蝦夷地史研究の提唱
- 第15回 北方交易と蝦夷地内国化

●事前学習

毎回、テキストを十分読みこなし、特に発表者は他文献も準備して、発表レジュメを作る。

各回約2時間の事前学習を要する。

●事後学習

再度、発表者の配布資料などとテキストを復習する。

各回約2時間の事後学習を要する。

●成績評価

発表内容や討論における発表頻度その他によって評価する。フィードバックとして最終回に講評する。

●テキスト

関根達人『中近世の蝦夷地と北方交易』(吉川弘文館、2014)

●参考書・参考資料等

特になし。

●備考

特になし。

●オフスアワー

金曜日 12:10~13:00

日本文学史特論 A

(春学期 / 2 単位)

田中 幹子

●テーマ

古代から中世にかけての主要な作品を変体仮名で読み、日本独自の文字文化を国際的視野から理解する。

●授業概要

文学史の流れに沿って、万葉集から新古今和歌集までの作品を変体かなで詠む。

●到達目標

文学史の知識を具体的な作品で得るとともに、万葉仮名や変体仮名になじみ、典拠作品を原本で読める力をつける。

●授業計画

第1回 万葉仮名の説明・万葉集の諸本の説明

第2回 万葉集巻1の和歌を詠む

第3回 万葉集巻20の和歌を詠む

第4回 万葉集の歌風のまとめと万葉仮名の読みのテスト

第5回 古今集の仮名の説明

第6回 古今集の切れを詠む

第7回 古今集の写本を詠む

第8回 伊勢物語の写本の説明

第9回 伊勢物語の初段を写本で読む

第10回 伊勢物語の芥川を写本で読む

第11回 平安時代の草仮名と行書を説明

第12回 古筆切れから平安時代の文字を読む

第13回 百人一首の写本の説明(室町時代の仮名)

第14回 百人一首の和歌を変体仮名で読む

第15回 変体仮名のテスト

●事前学習

手持ちのくずし辞典や変体仮名のテキストがあれば、事前に目を通すこと

各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

授業でとり上げた作品を変体仮名や万葉仮名で読めるように復習する。

各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

各作品ごとにテスト 70%、特徴的な変体文字についてレポート 30% テスト、レポートを返却して復習。

●テキスト

毎回配布

●参考書・参考資料等

授業内で紹介する。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

木曜日昼休み 於研究室

日本文学史特論 B

(秋学期 / 2 単位)

渡辺 さゆり

●テーマ

人形浄瑠璃と歌舞伎の歴史や作品を学び、日本伝統芸能について理解を深め、地域共創の役立つ知識を身につける。

●授業概要

日本伝統芸能の人形浄瑠璃は義太夫節と人形による演劇である。江戸時代は人形浄瑠璃の人気作品が歌舞伎として上演されることがしばしばあった。『菅原伝授手習鑑』もそのような作品の一つである。本授業ではまず人形浄瑠璃の基礎を学習し、『菅原伝授手習鑑』の「車曳」を読解する。その後「車曳」について人形浄瑠璃と歌舞伎のそれぞれの舞台映像を鑑賞する。

●到達目標

近世の戯曲を読解しながら人形浄瑠璃と歌舞伎を鑑賞する楽しさを体感し、日本伝統芸能の魅力を発見する。

●授業計画

第1回 ガイダンス

第2回 形浄瑠璃とは?

第3回 太夫と三味線

第4回 人形遣い

第5回 若手人形遣いの修行

第6回 『菅原伝授手習鑑』のあらすじと登場人物

第7回 菅原道真と天神信仰

第8回 「車曳」読解(前半)

第9回 「車曳」読解(後半)

第10回 「車曳」と人形浄瑠璃

第11回 「車曳」歌舞伎(関西)について

第12回 「車曳」歌舞伎(関東)について

第13回 「寺子屋の段」あらすじ

第14回 「寺子屋の段」と人形浄瑠璃

第15回 日本伝統芸能についてのまとめ

●事前学習

必要なプリントを事前配布するので、しっかり読んでくること。

各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

授業の内容を復習し、プリントの内容を正しく理解すること。

各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

授業での発表、発言内容、平常点で、総合的に評価します。最終回に講評を行う。

●テキスト

プリントを配布します。

●参考書・参考資料等

授業で指示します。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

講義終了後、7502 研究室にて対応します。(30 分程度)

比較文化特論Ⅱ A

(春学期 / 2 単位)

小笠原 はるの

●テーマ

ナラティブ研究法：他者と自己理解の場をひらき、地域共創に役立つ専門性を身につける

●授業概要

この講義では、人と人とが互いに理解しあうためのコミュニケーションの手法として、ナラティブ研究について学ぶ。わたしたち人間にとってナラティブ（物語）は、それがどれだけ傷つきやすく不完全なものであっても、わたしたちがお互いにもっとも近づきあえる可能性として存在する。

人が生きていく中で、わたしたちは人生のある部分については、それを「生きて」はいるが、「経験」してはいない。というも、経験するためには語りの形式が必要だからである。その語りは、多くの場合、それを語ろうとすることを妨げる力、例えば、聴き手との応答関係、トラウマとなる経験の深さ、共同体の中での語りの経験知などによって変容する。

人々が語ろうとしている物語はどのような物語か、またその語りを妨げようとしているものは何かを問うことで、語り手は、それまで自分のものといえなかった経験を自分のものだということができるようになり、さらに人々が互いの物語を知ることによって、人と人、人と社会とのつながりを生み出すことができるようになる。各自の問題意識を持ち寄り、ナラティブの諸相や揺らぎ、可能性についての考察を深めたい。

●到達目標

自分や他者がどのように語り、思考・表現しているかについて気づき、他者とのコミュニケーションについて深く考察することができるようになる。

●授業計画

- 第 1 回 インTRODクシヨン
- 第 2 回 言葉・物語・ケア
- 第 3 回 物語としての自己
- 第 4 回 外在化とオルタナティブ・ストーリー
- 第 5 回 無知のアプローチ
- 第 6 回 新しい専門性
- 第 7 回 ナラティブ・コミュニティ
- 第 8 回 物語としてのケア
- 第 9 回 事例研究 (1) 社会認識
- 第 10 回 事例研究 (2) 自己理解
- 第 11 回 事例研究 (3) 対話と葛藤
- 第 12 回 事例研究 (4) 多様性
- 第 13 回 事例研究 (5) 曖昧性
- 第 14 回 プロジェクト発表
- 第 15 回 まとめ

●事前学習

テキストを読み、疑問点を抽出しておくこと。
各回約 1 時間の事前学習を要する。

●事後学習

ディスカッションで考察したことについてまとめておくこと。
各回約 1 時間の事後学習を要する。

●成績評価

毎回の授業での課題のプレゼンテーション 60%、論文 40%
プレゼンテーションについてはそのつど授業内で講評する。
論文については 1 5 回目の授業で講評する

●テキスト

- *野口裕二『物語としてのケア—ナラティブ・アプローチの世界へ』：医学書院,2002
 - *松岡正剛『フラジャイル 弱さからの出発』ちくま学芸文庫,2005
- ほかに、必要に応じて指示する。

●参考書・参考資料等

必要に応じて紹介する。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

講義期間中毎週水曜日 16:10~17:00 7512 研究室

比較文化特論Ⅱ B

(秋学期 / 2 単位)

小笠原 はるの

●テーマ

語りをきく：ナラティブ研究へのアプローチを掘り下げ、地域共創に役立つ専門性を身につける

●授業概要

この講義では、人と人とが互いに理解しあうためのコミュニケーションの手法として、ナラティブ研究について学ぶ。わたしたち人間にとってナラティブ（物語）は、それがどれだけ傷つきやすく不完全なものであっても、わたしたちがお互いにもっとも近づきあえる可能性として存在する。

人が生きていく中で、わたしたち人生のある部分については、それを「生きて」はいるが「経験」してはいない。というも、経験するためには語りの形式が必要だからである。その語りは、多くの場合、それを語ろうとすることを妨げる力、例えば、聴き手との応答関係、トラウマとなる経験の深さ、共同体の中での語りの経験知などによって変容する。

人々が語ろうとしている物語はどのような物語か、またその語りを妨げようとしているものは何かを問うことで、語り手は、それまで自分のものといえなかった経験を自分のものだということができるようになり、さらに人々が互いの物語を知ることによって、人と人、人と社会とのつながりを生み出すことができるようになる。各自の問題意識を持ち寄り、ナラティブの諸相や揺らぎ、可能性についての考察を深めたい。

●到達目標

ナラティブという概念を理解したうえで、各人の研究に役立てる。

●授業計画

- 第 1 回 ナラティブとは
- 第 2 回 聴くという行為
- 第 3 回 だれの前で、という問題
- 第 4 回 声がとどくということ
- 第 5 回 会うということ
- 第 6 回 迎え入れるということ
- 第 7 回 苦痛の苦痛
- 第 8 回 <ふれる>とくさわる>
- 第 9 回 亨けるということ
- 第 10 回 歓待の掟
- 第 11 回 意味の彼方へ
- 第 12 回 プロジェクト(1) 関わり合い
- 第 13 回 プロジェクト(2) 他者性の確認
- 第 14 回 プロジェクト(3) 関係性のみなおし
- 第 15 回 まとめ

●事前学習

テキストを読み、疑問点を抽出しておくこと。
各回約 1 時間の事前学習を要する。

●事後学習

ディスカッションで考察したことについてまとめておくこと。
各回約 1 時間の事後学習を要する。

●成績評価

毎回の授業での課題のプレゼンテーション 60%、論文 40%
プレゼンテーションについてはそのつど授業内で講評する。
論文については 1 5 回目の授業で講評する。

●テキスト

- *鷺田清一『「聴く」ことの力 臨床哲学試論』ちくま学芸文庫,2015
 - *野矢茂樹『他者の声 実在の声』産業図書,2005
- ほかに、必要に応じて指示する。

●参考書・参考資料等

必要に応じて紹介する。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

講義期間中毎週水曜日 16:10~17:00 7512 研究室

比較歴史特論 I A

(春学期 / 2 単位)
高瀬 奈津子

●テーマ

ユーラシア東部地域における中国隋唐王朝の歴史の流れを把握し、地域創生に役立つ教養を身につける。

●授業概要

隋唐時代は、中国史上、政治・社会経済・文化の面で最も華やかだった時代である。本授業では、東部ユーラシア地域における隋唐王朝の位置づけを理解し、隋唐時代の中国社会・文化の多様性を理解することを目的に、隋唐史研究の古典的論考である陳寅恪著『唐代政治史述論稿』を読み、あわせて引用されている史料を分析しながら、歴史研究の手法を学ぶ。

●到達目標

- ・歴史研究に必要な、論理的思考力を身に付ける。
- ・史料の収集、読解力を身に付ける。

●授業計画

ゼミナール形式で分担を決めて講読していく。引用されている原史料には必ず当たってもらうなど、古典漢文の訓読にも取り組んでもらう。

- 第1回 はじめに
- 第2回 『唐代政治史述論稿』「上篇 統治階級之氏族及其昇降」
— 唐室李氏の世系について
- 第3回 『唐代政治史述論稿』「上篇 統治階級之氏族及其昇降」
— 皇帝陵からの分析
- 第4回 『唐代政治史述論稿』「上篇 統治階級之氏族及其昇降」
— 胡化と漢化
- 第5回 『唐代政治史述論稿』「上篇 統治階級之氏族及其昇降」
— 則天武后による「関中本位政策」の改変
- 第6回 『唐代政治史述論稿』「上篇 統治階級之氏族及其昇降」
— 科挙出身官僚の進出
- 第7回 『唐代政治史述論稿』「上篇 統治階級之氏族及其昇降」
— 玄宗期以降の宦官専政の出現
- 第8回 テーマ発表
- 第9回 『唐代政治史述論稿』「上篇 統治階級之氏族及其昇降」
— 長安洛陽文化と河北文化
- 第10回 『唐代政治史述論稿』「上篇 統治階級之氏族及其昇降」
— 安史の乱と民族問題
- 第11回 『唐代政治史述論稿』「上篇 統治階級之氏族及其昇降」
— 河朔藩鎮と民族
- 第12回 『唐代政治史述論稿』「上篇 統治階級之氏族及其昇降」
— 唐朝と西北民族の動向
- 第13回 『唐代政治史述論稿』「上篇 統治階級之氏族及其昇降」
— 唐朝と突厥
- 第14回 『唐代政治史述論稿』「上篇 統治階級之氏族及其昇降」
— まとめ
- 第15回 テーマ発表

●事前学習

- ・それぞれ担当となった箇所について、本文を訳し、引用されている原史料について、資料を人数分作成すること。
- ・担当外の者も、本文について目を通し、自分なりの訳を準備しておくこと。

各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

本文をもう一度読み直し、陳寅恪氏の論証の流れを確認すること。各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

レポート50%、研究発表50%、計100%とする。レポート及び研究発表については授業内で講評する。

●テキスト

必要部分をプリント配布。

●参考書・参考資料等

自宅学習においては、氣賀澤保規著『中国の歴史6 絢爛たる世界帝国 隋唐時代』（講談社、2005年）など、日本語で書かれている隋唐史の概説書を参照のこと。その他、随時、紹介する。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

講義期間中毎週火曜日 12:20～12:50 7523 研究室

比較歴史特論 I B

(秋学期 / 2 単位)
高瀬 奈津子

●テーマ

ユーラシア東部地域における中国隋唐王朝の歴史の流れを把握し、地域創生に役立つ教養を身につける。

●授業概要

隋唐時代は、中国史上、政治・社会経済・文化の面で最も華やかだった時代である。本授業では、東部ユーラシア地域における隋唐王朝の位置づけを理解し、隋唐時代の中国社会・文化の多様性を理解することを目的に、隋唐史研究の古典的論考である陳寅恪著『唐代政治史述論稿』を読み、あわせて引用されている史料を分析しながら、歴史研究の手法を学ぶ。

●到達目標

- ・歴史研究に必要な、論理的思考力を身に付ける。
- ・史料の収集、読解力を身に付ける。

●授業計画

ゼミナール形式で分担を決めて講読していく。引用されている原史料には必ず当たってもらうなど、古典漢文の訓読にも取り組んでもらう。

- 第1回 はじめに
- 第2回 『唐代政治史述論稿』「中篇 政治革命及党派分野」
— 「関中本位政策」
- 第3回 『唐代政治史述論稿』「中篇 政治革命及党派分野」
— 中央における政治クーデターと宮城北門
- 第4回 『唐代政治史述論稿』「中篇 政治革命及党派分野」
— 太宗～中宗～玄宗の期の政変
- 第5回 『唐代政治史述論稿』「中篇 政治革命及党派分野」
— 唐朝における皇位継承の不安定性
- 第6回 『唐代政治史述論稿』「中篇 政治革命及党派分野」
— 山東士族
- 第7回 『唐代政治史述論稿』「中篇 政治革命及党派分野」
— 唐朝と山東士族との関係
- 第8回 テーマ発表
- 第9回 『唐代政治史述論稿』「中篇 政治革命及党派分野」
— 牛李の党争
- 第10回 『唐代政治史述論稿』「中篇 政治革命及党派分野」
— 新興科挙官僚
- 第11回 『唐代政治史述論稿』「中篇 政治革命及党派分野」
— 永貞内禅と元和中興
- 第12回 『唐代政治史述論稿』「中篇 政治革命及党派分野」
— 宦官の専政～憲宗・穆宗・敬宗～
- 第13回 『唐代政治史述論稿』「中篇 政治革命及党派分野」
— 宦官の専政～文宗・武宗～
- 第14回 『唐代政治史述論稿』「中篇 政治革命及党派分野」
— 宦官の専政～宣宗以降
- 第15回 テーマ発表

●事前学習

- ・それぞれ担当となった箇所について、本文を訳し、引用されている原史料について、資料を人数分作成すること。
- ・担当外の者も、本文について目を通し、自分なりの訳を準備しておくこと。

各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

本文をもう一度読み直し、陳寅恪氏の論証の流れを確認すること。各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

レポート50%、研究発表50%、計100%とする。レポート及び研究発表については授業内で講評する。

●テキスト

必要部分をプリント配布。

●参考書・参考資料等

自宅学習においては、氣賀澤保規著『中国の歴史6 絢爛たる世界帝国 隋唐時代』（講談社、2005年）など、日本語で書かれている隋唐史の概説書を参照のこと。その他、随時、紹介する。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

講義期間中毎週火曜日 12:20～12:50 7523 研究室

先史文化特論ⅡA

(春学期 / 2単位)
瀬川 拓郎

●テーマ

アイヌ民族の歴史の解明は多文化共生と地域共創の重要な礎であり、そのために必要なアイヌ民族考古学の理論と方法を学ぶ(1)

●授業概要

考古学・人類学・民族学・生態学などを横断し、アイヌ民族の歴史にアプローチするアイヌ民族考古学の理論と方法を理解することで、国際的な社会文化活動や地域振興に寄与・貢献する専門職・指導者に必要な専門的知識と考察力を習得する。

●到達目標

アイヌ史各時代の重要な論点をとりあげ、研究状況を具体的に紹介しながら、討論を通じて領域横断的なアイヌ民族考古学の方法と理論を実践的に考察する。

●授業計画

- 第1回 イントロダクション 民族考古学の方法と研究史
- 第2回 旧石器時代 日本列島人の成立と人類学・言語学
- 第3回 縄文時代 環状列石・周堤墓論
- 第4回 縄文時代 ミイラ習俗論(1) ミイラ習俗の起源をめぐる学説
- 第5回 縄文時代 ミイラ習俗論(2) ミイラ習俗と縄文時代の葬制
- 第6回 続縄文時代 クマ祭り起源論
- 第7回 続縄文時代 海民交流論
- 第8回 擦文時代 祭具・祭儀論(1) アイヌ祭儀の成立
- 第9回 擦文時代 祭具・祭儀論(2) アイヌ祭具の起源
- 第10回 擦文時代 銅鏡・錫杖・銅鏡論
- 第11回 擦文時代 廃屋祭祀論
- 第12回 擦文時代 祖印論(1) 祖印をめぐる学説
- 第13回 擦文時代 祖印論(2) 祖印の起源の分類学的考察
- 第14回 擦文時代 青苗文化論
- 第15回 まとめ レポート提出

●事前学習

テキストを熟読し、ノートに要点を整理する。
各回約3時間の事前学習を要する。

●事後学習

講義と討論の内容をノートに整理する。
各回約2時間の事後学習を要する。

●成績評価

平常点を50%、2回のレポートを50%、計100%で評価する。レポートについては講評をお知らせ配信で公表する。

●テキスト

次の文献をテキストとして使用するので各自準備する。ほかに論文のコピーなどを適宜配布する。

- ・瀬川拓郎 2005『アイヌ・エコシステムの考古学』北海道出版企画センター
 - ・瀬川拓郎 2007『アイヌの歴史—海と宝のノマド』講談社選書メチエ
 - ・瀬川拓郎 2011『アイヌの世界』講談社選書メチエ
 - ・瀬川拓郎 2015『アイヌ学入門』講談社現代新書
 - ・瀬川拓郎 2016『アイヌと縄文—もうひとつの日本の歴史』ちくま代新書
 - ・瀬川拓郎 2017『縄文の思想』講談社現代新書
- ### ●参考書・参考資料等
- 講義において適宜指示する。

●備考

特になし

●オフスアワー

講義期間中の昼休み時間を基本とする。

先史文化特論ⅡB

(秋学期 / 2単位)
瀬川 拓郎

●テーマ

アイヌ民族の歴史の解明は多文化共生と地域共創の重要な礎であり、そのために必要なアイヌ民族考古学の理論と方法を学ぶ(2)

●授業概要

考古学・人類学・民族学・生態学などを横断し、アイヌ民族の歴史にアプローチするアイヌ民族考古学の理論と方法を理解することで、国際的な社会文化活動や地域振興に寄与・貢献する専門職・指導者に必要な専門的知識と考察力を習得する。

●到達目標

アイヌ史各時代の重要な論点をとりあげ、研究状況を具体的に紹介しながら、討論を通じて領域横断的なアイヌ民族考古学の方法と理論を実践的に考察する。

●授業計画

- 第1回 ニブタニ文化期 チャシ論
- 第2回 ニブタニ文化期 地域社会論 アイヌ社会におけるサケの製品化
- 第3回 ニブタニ文化期 地域社会論 本州社会におけるサケ製品の消費
- 第4回 ニブタニ文化期 地域社会論 サケ生態の地域的復元と生態学
- 第5回 ニブタニ文化期 地域社会論 サケ生態の地域的復元と地理学
- 第6回 ニブタニ文化期 地域社会論 遡上河川・産卵場と集落・地域集団
- 第7回 ニブタニ文化期 地域社会論 集落移動と婚姻関係から見た川上アイヌの社会
- 第8回 ニブタニ文化期 地域社会論 送り場とチャシから見た川上アイヌの社会
- 第9回 ニブタニ文化期 地域社会論 漁法から見た川上アイヌの社会
- 第10回 ニブタニ文化期 地域社会論 産卵場と地域集団の階層的構造
- 第11回 ニブタニ文化期 地域社会論 上川盆地の河川生態系と河川交通
- 第12回 ニブタニ文化期 地域社会論 北海道の河川生態系と河川交通
- 第13回 ニブタニ文化期 地域社会論 アイヌのランドスケープ
- 第14回 ニブタニ文化期 地域社会論 和人のランドスケープ
- 第15回 まとめ レポート提出

●事前学習

テキストを熟読し、ノートに要点を整理する。
各回約3時間の事前学習を要する。

●事後学習

講義と討論の内容をノートに整理する。
各回約2時間の事後学習を要する。

●成績評価

平常点を50%、2回のレポートを50%、計100%で評価する。レポートについては講評をお知らせ配信で公表する。

●テキスト

次の文献をテキストとして使用するので各自準備する。ほかに論文のコピーなどを適宜配布する。

- ・瀬川拓郎 2005『アイヌ・エコシステムの考古学』北海道出版企画センター
- ・瀬川拓郎 2007『アイヌの歴史—海と宝のノマド』講談社選書メチエ
- ・瀬川拓郎 2011『アイヌの世界』講談社選書メチエ
- ・瀬川拓郎 2015『アイヌ学入門』講談社現代新書
- ・瀬川拓郎 2016『アイヌと縄文—もうひとつの日本の歴史』ちくま代新書

●参考書・参考資料等

講義において適宜指示する。

●備考

特になし

●オフスアワー

講義期間中の昼休み時間を基本とする。

先史文化特論Ⅲ A

(春学期 / 2 単位)

川名 広文

●テーマ

東南アジアの先史文化（前半）を学び、見解を深め、地域共創力を身につける。

●授業概要

東南アジアの先史時代は、熱帯という異なる生態環境にありながらも、完新世には島嶼部を形成したり、河口に貝塚を営んだりして狩猟採集社会の諸相において、日本列島のそれとの共通性がみられる。東南アジアにおける先史文化・社会の動態を比較考古学的な視点から検討していく。

●到達目標

関係する雑誌論文を参考に、理解を深めるとともに考古学の研究手法を学ぶ。

●授業計画

- 第1回 旧石器時代の島嶼部
- 第2回 旧石器時代の大陸・半島部
- 第3回 中石器時代ホアビニアン文化の占地
- 第4回 中石器時代ホアビニアン文化の石器
- 第5回 中石器時代ホアビニアン文化の石器（続）
- 第6回 中石器時代ホアビニアン文化の骨角器
- 第7回 中石器時代ホアビニアン文化の土器存否
- 第8回 中石器時代ホアビニアン文化の貝塚
- 第9回 中石器時代ホアビニアン文化の生業
- 第10回 中石器時代ホアビニアン文化の葬制
- 第11回 中石器時代ホアビニアン文化の壁画
- 第12回 中石器時代の島嶼部
- 第13回 縄文時代の文化要素・社会
- 第14回 縄文文化の異同
- 第15回 東南アジア先史文化の特徴

●事前学習

指示された雑誌論文を通読してくる。
各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

使用した論文やノートを参照し、大切な事項を再確認する。
各回約50分の事後学習を要する。

●成績評価

取り組む姿勢、発表内容、レポートなどを総合して評価する。発表や提出課題を精査し、次回までに不備や難点を再検討してもらう。

●テキスト

P.ベルウッド『太平洋』（東南アジアとオセアニアの人類史）：
法政大学出版局,1989

●参考書・参考資料等

*『東南アジアの考古学』（世界の考古学⑧）：同成社,1998

●備考

特になし

●オフィスアワー

火曜日 12:15~12:55 7503 研究室

先史文化特論Ⅲ B

(秋学期 / 2 単位)

川名 広文

●テーマ

東南アジアの先史文化（後半）を学び、見解を深め、地域共創力を身につける。

●授業概要

東南アジアの先史時代は、熱帯という異なる生態環境にありながらも、先進の中国文明の影響を受ける歴史地理的環境にあった点、また古代国家成立の基盤が水稻農耕にあったこと、さらに完新世には島嶼部を形成したなどの諸相において、日本列島のそれとの共通点が見られる。東南アジアにおける先史文化・社会の動態を比較考古学的な視点から検討していく。

●到達目標

関係する雑誌論文を参考に、理解を深めるとともに考古学の研究手法を学ぶ。

●授業計画

- 第1回 稲作を伴う新石器時代の幕開け
- 第2回 新石器時代の石器
- 第3回 新石器時代の土器
- 第4回 新石器時代の土器（続）
- 第5回 新石器時代の生活空間
- 第6回 新石器時代の生業
- 第7回 新石器時代の埋葬
- 第8回 初期金属器時代の幕開け
- 第9回 金属器時代の青銅器
- 第10回 金属器時代の青銅器（続）
- 第11回 金属器時代の生業
- 第12回 金属器時代の葬制
- 第13回 金属器時代の交易
- 第14回 金属器時代の社会構造
- 第15回 古代国会の成立

●事前学習

指示された雑誌論文を通読してくる。
各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

使用した論文やノートを参照し、大切な事項を再確認する。
各回約50分の事後学習を要する。

●成績評価

取り組む姿勢、発表内容、レポートなどを総合して評価する。発表や提出課題を精査し、次回までに不備や難点を再検討してもらう。

●テキスト

P.ベルウッド『太平洋』（東南アジアとオセアニアの人類史）：
法政大学出版局,1989

●参考書・参考資料等

*『東南アジアの考古学』（世界の考古学⑧）：同成社,1998

●備考

特になし

●オフィスアワー

火曜日 12:15~12:55 7503 研究室

先史文化特論Ⅳ

(夏期集中／2単位)

千本 真生

●テーマ

ヨーロッパの先史考古学を学び、見解を深め、地域共創力を身につける。

●授業概要

この授業では、欧米考古学研究の歴史について要点をおさえながら、ヨーロッパのバルカン地域における先史文化について学ぶ講義形式の授業である。時代の範囲は旧石器時代から青銅器時代までを対象とする。アジアと内陸ヨーロッパのあいだに位置するバルカン半島では、独自の先史文化が開花した。ヨーロッパ先史研究においてとくに重要な歴史的出来事に、農耕牧畜の導入、牧畜集団の移動と拡散、黄金文明の繁栄、古代都市文明の波及などが挙げられる。授業では最新の調査成果も紹介しながら、ヨーロッパ古代社会の基礎をなすバルカン先史文化について講ずる。

●到達目標

1. 先史時代バルカン半島の歴史と文化を学ぶことで、先史時代ヨーロッパの理解を深める。
2. 東欧の考古学研究の成果にふれることで、人類史を俯瞰する視点を身につける。

●授業計画

- 第1回 ヨーロッパ・バルカン半島の考古学を通じて、何を学ぶか
- 第2回 東欧・バルカン半島の地理と自然環境
- 第3回 バルカン半島の旧石器文化
- 第4回 バルカン半島の中石器文化
- 第5回 バルカン半島における新石器化
- 第6回 バルカン半島における定住社会の成立とその物質文化
- 第7回 バルカン半島における銅石器時代の防衛性集落と集団墓
- 第8回 黒海西岸域におけるヴァルナ墓と黄金文明
- 第9回 バルカン半島における銅石器時代の銅・塩・交易
- 第10回 ククテニ・トリポリエ文化と巨大集落の誕生と展開
- 第11回 北方ステップ集団の到来と青銅器時代の幕開け
- 第12回 バルカン半島における前期青銅器時代集落の様相
- 第13回 青銅器時代社会の複雑化と初期都市文明の影響
- 第14回 青銅器時代以降のバルカン半島と古代トラキア人
- 第15回 全体のまとめ

●事前学習

バルカン半島の通史について一通り理解しておくこと。

考古学に関する基礎知識を知っておくこと。

各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

授業中に配布する資料を見直し、内容について理解しておくこと。

各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

平常点75%、レポート25%。レポートの講評は最終回に行う。

●テキスト

特になし。

●参考書・参考資料等

Barry Cunliffe 1994 *The Oxford Illustrated Prehistory of Europe*, Oxford University Press.

Douglass Bailey 1999 *Balkan Prehistory: Exclusion, Incorporation and Identity*, Routledge

●備考

特になし。

●オフィスアワー

講義期間中、授業終了後に対応する。

考古学専門実習

(春学期／2単位)

川名 広文

●テーマ

考古学調査の方法を学び、見解を深め、地域共創力を身につける。

●授業概要

考古調査士資格認定機構が設ける「考古学調査士」(1級)資格申請に際しての必修科目である。

考古学に関わる遺跡の野外調査の方法や技術、および発掘後の整理・報告の技術や作法について、実技を交えながら習得する。

●到達目標

考古学の調査や整理作業に必要な基本的技術や知見を習得し、実際の現場に備える。

●授業計画

- 第1回 一般調査・分布調査
- 第2回 発掘調査の諸準備
- 第3回 地形測量
- 第4回 調査区・グリッドの設定
- 第5回 遺構実測図(平面図・断面図など)
- 第6回 遺構の写真撮影
- 第7回 出土遺物の洗浄・注記
- 第8回 遺物の拓本
- 第9回 遺物の実測・トレース(土器)
- 第10回 遺物の実測・トレース(石器)
- 第11回 遺物の実測・トレース(骨角器)
- 第12回 遺物の実測・トレース(木器・金属器)
- 第13回 遺物の写真撮影
- 第14回 遺構トレース・版下作成
- 第15回 報告書の編集

●事前学習

使用するテキストの当該箇所や遺跡報告書にあたっておく。

各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

テキストやノートを参照し、技術を再確認する。

各回約50分の事後学習を要する。

●成績評価

取り組む姿勢、作業成果で評価する。作業成果を精査し、次回までに不備や難点を再検討してもらう。

●テキスト

『埋蔵文化財調査の基礎テクニック』(考古調査ハンドブック1): ニューサイエンス社,2009 3,000円

●参考書・参考資料等

特になし。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

火曜日 12:15~12:55 7503研究室

文化学特論

(秋学期 / 2 単位)

南山 雅樹

●テーマ

地域共創を考えるにあたり、様々な時代、民族の文化の融合について取り上げて研究する。

●授業概要

音楽を鑑賞し、その成り立ちを分析・紹介します。主としてジャズ・クラシックを採り上げ、その歴史の変遷、どのような文化が融合して生まれたのかを検証し、ポピュラー音楽全般への影響についても考察します。

●到達目標

様々な音楽を多くの視野で捉えられるようにするのが本講の主たる目標ですが、このようなアプローチをぜひ院生のみなさんの研究テーマにも生かして頂きたいと考えています。

●授業計画

- 第1回 ジャズの歴史とその発展
- 第2回 ジャズの生い立ち
- 第3回 ジャズの表現方法の特色
- 第4回 ジャズの変遷
- 第5回 研究発表 (1)
- 第6回 クラシック音楽
- 第7回 時代区分
- 第8回 歴史の変遷
- 第9回 異文化との融合
- 第10回 研究発表 (2)
- 第11回 民族音楽、世界のポピュラー音楽
- 第12回 各地区の音楽の特色
- 第13回 他のジャンルとの融合
- 第14回 研究発表 (3)
- 第15回 まとめ

●事前学習

普段聴いている音楽があれば、その成り立ちについて研究してみたいと思います。

各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

本講でとりあげた音楽以外の音楽についても、図書館の資料(本、CD、DVD など)で各回のテーマに沿って接してみてください。疑問な点は次回の講義で解決を図ります。

各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

研究発表の内容 50%、テーマに基づくディスカッションの内容 50%で評価する。

●テキスト

使用する予定はありません。

●参考書・参考資料等

講義の際に随時紹介します。

●備考

特になし。

●オフスアワー

講義の前後の時間を活用して随時対応する。

表象文化史特別演習 A

(春学期 / 2 単位)
松友 知香子

●テーマ

研究計画を確認し、修士論文を執筆する。

●授業概要

表象文化史特論 A・B で学んだことを基礎として、修士論文の指導を行う。それぞれのテーマに応じて、先行研究や資料を読み込み、演習での議論を通じて、独自のテーマを提起し、実証的な論文を執筆する。

●到達目標

文化学の高度な理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 研究計画の確認
- 第3回 研究進捗状況の報告 (1)
- 第4回 研究進捗状況の報告 (2)
- 第5回 研究進捗状況の報告 (3)
- 第6回 研究進捗状況の報告 (4)
- 第7回 研究進捗状況の報告 (5)
- 第8回 修士論文執筆内容の指導 (1)
- 第9回 修士論文執筆内容の指導 (2)
- 第10回 修士論文執筆内容の指導 (3)
- 第11回 修士論文執筆内容の指導 (4)
- 第12回 修士論文執筆内容の指導 (5)
- 第13回 修士論文執筆内容の指導 (6)
- 第14回 春学期の成果報告
- 第15回 夏期休暇中の研究予定確認

●事前学習

修士論文のテーマを深めるべく、様々な資料を渉猟する。
各回約 2 時間の事前学習を要する。

●事後学習

議論した事柄について整理し、問題点をより明確にしておく。
各回約 2 時間の事後学習を要する。

●成績評価

平常点、ディスカッションの参加度、修士論文で評価する。

●テキスト

参考となるテキストを授業中に配布する。

●参考書・参考資料等

別途、参考資料を授業中に配布する。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

講義期間中毎週火曜日 12:00～13:00 7520 研究室

表象文化史特別演習 B

(秋学期 / 2 単位)
松友 知香子

●テーマ

研究テーマに則った修士論文を提出する。

●授業概要

表象文化史特論 A・B で学んだことを基礎として、芸術作品を現象学的にアプローチする方法論について考察する。

具体的には、ドイツの現象学者ハインリッヒ・ロムパッハ (1923-2004) の著作を渉猟しながら、絵画分析の方法について議論する。

●到達目標

文化学の高度な理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。

●授業計画

- 第1回 研究成果の報告
- 第2回 修士論文執筆内容の指導 (1)
- 第3回 修士論文執筆内容の指導 (2)
- 第4回 修士論文執筆内容の指導 (3)
- 第5回 修士論文執筆内容の指導 (4)
- 第6回 修士論文執筆内容の指導 (5)
- 第7回 修士論文執筆内容の指導 (6)
- 第8回 修士論文中間発表会の準備 (1)
- 第9回 修士論文中間発表会の準備 (2)
- 第10回 修士論文中間発表会予行
- 第11回 中間発表会における問題点の整理
- 第12回 中間発表会における問題点修正
- 第13回 修士論文の仕上げ (1)
- 第14回 修士論文の仕上げ (2)
- 第15回 修士論文提出の最終報告

●事前学習

修士論文のテーマを深めるべく、様々な資料を渉猟する。
各回約 2 時間の事前学習を要する。

●事後学習

議論した事柄について整理し、問題点をより明確にしておく。
各回約 2 時間の事後学習を要する。

●成績評価

平常点、ディスカッションの参加度、修士論文で評価する。

●テキスト

参考となるテキストを授業中に配布する。

●参考書・参考資料等

別途、参考資料を授業中に配布する。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

講義期間中毎週火曜日 12:00～13:00 7520 研究室

異文化コミュニケーション特別演習 A

(春学期 / 2 単位)

御手洗 昭治

●テーマ

研究計画を確認し、修士論文を執筆する。

●授業概要

演習では、異文化コミュニケーション特論で学んだ研究領域や理論を基に受講生は、(1) 担当教員と面接を行い、許可を得てから早期に修士論文のテーマ、研究目的、対象、方法を決め、(2) 年間スケジュールも決め、それに沿って研究を進めてもらう。(3) 修士論文完成までのプロセスで、数回、進み具合と論文内容についての報告が求められ、それに対する相互ディスカッションや助言がなされる。

●到達目標

文化学の高度な理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 研究計画の確認
- 第3回 研究進捗状況の報告 (1)
- 第4回 研究進捗状況の報告 (2)
- 第5回 研究進捗状況の報告 (3)
- 第6回 研究進捗状況の報告 (4)
- 第7回 研究進捗状況の報告 (5)
- 第8回 修士論文執筆内容の指導 (1)
- 第9回 修士論文執筆内容の指導 (2)
- 第10回 修士論文執筆内容の指導 (3)
- 第11回 修士論文執筆内容の指導 (4)
- 第12回 修士論文執筆内容の指導 (5)
- 第13回 修士論文執筆内容の指導 (6)
- 第14回 春学期の成果報告
- 第15回 夏期休暇中の研究予定確認

●事前学習

打ち合わせの報告に来る前に各章の構想を立て、ドラフト原稿を用意しておくこと。

各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

打ち合わせの報告の際、アドバイスや提案を基にドラフト原稿の校正を行う。

各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

平常点 50%、予習のリーディング・アサインメントに基づくディスカッションの貢献度 20%、各章の研究成果 30%

●テキスト

『ライシャワーの名言に学ぶ異文化理解』

御手洗昭治編著・小笠原はるの著 (ゆまに書房) 2016 年, ¥1800

●参考書・参考資料等

御手洗昭治編著・小笠原はるの著『グローバル・異文化交流史』(明石書店) 2018 年

●備考

特になし。

●オフィスアワー

水曜の 9:30a.m.—10:30a.m. (メール等で事前のアポイントメントを取ることが望ましい。)

異文化コミュニケーション特別演習 B

(秋学期 / 2 単位)

御手洗 昭治

●テーマ

研究テーマに則った修士論文を提出する。

●授業概要

演習では、異文化コミュニケーション特論で学んだ研究領域や理論を基に受講生は、(1) 担当教員と面接を行い、許可を得てから早期に修士論文のテーマ、研究目的、対象、方法を決め、(2) 年間スケジュールも決め、それに沿って研究を進めてもらう。(3) 修士論文完成までのプロセスで、数回、進み具合と論文内容についての報告が求められ、それに対する相互ディスカッションや助言がなされる。

●到達目標

文化学の高度な理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。

●授業計画

- 第1回 研究成果の報告
- 第2回 修士論文執筆内容の指導 (1)
- 第3回 修士論文執筆内容の指導 (2)
- 第4回 修士論文執筆内容の指導 (3)
- 第5回 修士論文執筆内容の指導 (4)
- 第6回 修士論文執筆内容の指導 (5)
- 第7回 修士論文執筆内容の指導 (6)
- 第8回 修士論文中間発表会の準備 (1)
- 第9回 修士論文中間発表会の準備 (2)
- 第10回 修士論文中間発表会予行
- 第11回 中間発表会における問題点の整理
- 第12回 中間発表会における問題点修正
- 第13回 修士論文の仕上げ (1)
- 第14回 修士論文の仕上げ (2)
- 第15回 修士論文提出の最終報告

●事前学習

打ち合わせの報告に来る前に各章の構想を立て、ドラフト原稿を用意しておくこと。

各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

打ち合わせの報告の際、アドバイスや提案を基にドラフト原稿の校正を行う。

各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

平常点 50%、予習のリーディング・アサインメントに基づくディスカッションの貢献度 20%、各章の研究成果 30%

●テキスト

『ライシャワーの名言に学ぶ異文化理解』

御手洗昭治編著・小笠原はるの著 (ゆまに書房) 2016 年, ¥1800

●参考書・参考資料等

授業で発表。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

水曜の 9:30a.m.—10:30a.m. (メール等で事前のアポイントメントを取ることが望ましい。)

身体文化特別演習 A

(春学期 / 2 単位)

瀧元 誠樹

●テーマ

研究計画を確認し、修士論文を執筆する。

●授業概要

「スポーツの現在について考える」をテーマに、歴史や社会、環境がどのようにスポーツへ影響を与えているのか、逆にスポーツが歴史や社会、環境にどのように影響を与えているのかを考えていくことが大きな目的となる。そこから受講生の関心に沿った個別のテーマを再考し、研究計画を立て直し、研究に取り組む。

●到達目標

文化学の高度な理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 研究計画の確認
- 第3回 研究進捗状況の報告 (1)
- 第4回 研究進捗状況の報告 (2)
- 第5回 研究進捗状況の報告 (3)
- 第6回 研究進捗状況の報告 (4)
- 第7回 研究進捗状況の報告 (5)
- 第8回 修士論文執筆内容の指導 (1)
- 第9回 修士論文執筆内容の指導 (2)
- 第10回 修士論文執筆内容の指導 (3)
- 第11回 修士論文執筆内容の指導 (4)
- 第12回 修士論文執筆内容の指導 (5)
- 第13回 修士論文執筆内容の指導 (6)
- 第14回 春学期の成果報告
- 第15回 夏期休暇中の研究予定確認

●事前学習

テキストを読み、用語解説・要約・私見考察によるレジュメを作成して授業準備をする。

各回約6時間の事前学習を要する。

●事後学習

授業内容を振り返り、レジュメやノートの整理をし、修士論文執筆に活かす。

各回約2時間の事後学習を要する。

●成績評価

平常点 100%

●テキスト

稲垣正浩他『近代スポーツのミッションは終わったか 身体・メディア・世界』: 平凡社, 2009

●参考書・参考資料等

適宜、紹介する。

●備考

特になし。

●オフスアワー

講義期間中の昼休み時間を基本とする。

身体文化特別演習 B

(秋学期 / 2 単位)

瀧元 誠樹

●テーマ

研究テーマに則った修士論文を提出する。

●授業概要

受講生の取り組んでいる修士論文テーマを中心に、関連領域のテキスト講読やディスカッションをしていく。修士論文作成にあたっては、テーマが拡散することは好まれないけれども、むしろ本演習においては思考の幅が狭まらず視野が広がるようにしていきたい。

●到達目標

文化学の高度な理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。

●授業計画

- 第1回 研究成果の報告
- 第2回 修士論文執筆内容の指導 (1)
- 第3回 修士論文執筆内容の指導 (2)
- 第4回 修士論文執筆内容の指導 (3)
- 第5回 修士論文執筆内容の指導 (4)
- 第6回 修士論文執筆内容の指導 (5)
- 第7回 修士論文執筆内容の指導 (6)
- 第8回 修士論文中間発表会の準備 (1)
- 第9回 修士論文中間発表会の準備 (2)
- 第10回 修士論文中間発表会予行
- 第11回 中間発表会における問題点の整理
- 第12回 中間発表会における問題点修正
- 第13回 修士論文の仕上げ (1)
- 第14回 修士論文の仕上げ (2)
- 第15回 修士論文提出の最終報告

●事前学習

レジュメを作成し、授業準備する。

各回約6時間の事前学習を要する。

●事後学習

授業内容を振り返り、修士論文執筆に活かす。

各回約2時間の事後学習を要する。

●成績評価

平常点 100%

●テキスト

適宜、紹介する。

●参考書・参考資料等

適宜、紹介する。

●備考

特になし。

●オフスアワー

講義期間中の昼休み時間を基本とする。

日本文学特別演習 I A

(春学期 / 2 単位)

荒木 奈美

●テーマ

研究計画を確認し、修士論文を執筆する。

●授業概要

修士論文完成に向け、より実際的な指導をすることを主たる目的とする。すでに研究主題が定まっている院生を対象とし、論文としてまとめたい内容を具体的かつ効果的に記述するための技法について学ぶ。今年度は宮沢賢治を中心に扱う。

●到達目標

文化学の高度な理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 研究計画の確認
- 第3回 研究進捗状況の報告 (1)
- 第4回 研究進捗状況の報告 (2)
- 第5回 研究進捗状況の報告 (3)
- 第6回 研究進捗状況の報告 (4)
- 第7回 研究進捗状況の報告 (5)
- 第8回 修士論文執筆内容の指導 (1)
- 第9回 修士論文執筆内容の指導 (2)
- 第10回 修士論文執筆内容の指導 (3)
- 第11回 修士論文執筆内容の指導 (4)
- 第12回 修士論文執筆内容の指導 (5)
- 第13回 修士論文執筆内容の指導 (6)
- 第14回 春学期の成果報告
- 第15回 夏期休暇中の研究予定確認

●事前学習

次週扱う箇所を読み、読書レポートを書いてくる。

各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

授業を通して考えたことなどを授業レポートとしてまとめておく。

各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

毎回の授業で課すミニレポート6割、およびまとめの回に課す、口頭発表4割を合わせた総合評価とする。

●テキスト

授業ごとに指示する。

●参考書・参考資料等

参加者の話し合いの内容に応じて、参考資料を授業ごとに準備・配布する。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

毎週火曜日-木曜日 12:30-12:50 (要事前連絡)

日本文学特別演習 I B

(秋学期 / 2 単位)

荒木 奈美

●テーマ

研究テーマに則った修士論文を提出する。

●授業概要

修士論文完成に向け、より実際的な指導をすることを主たる目的とする。春学期で得た知見をもとに、論文添削指導が中心となる。添削指導に当たっては、内容に応じて論文内容を深めるための課題を課すこともある。

●到達目標

文化学の高度な理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。

●授業計画

- 第1回 研究成果の報告
- 第2回 修士論文執筆内容の指導 (1)
- 第3回 修士論文執筆内容の指導 (2)
- 第4回 修士論文執筆内容の指導 (3)
- 第5回 修士論文執筆内容の指導 (4)
- 第6回 修士論文執筆内容の指導 (5)
- 第7回 修士論文執筆内容の指導 (6)
- 第8回 修士論文中間発表会の準備 (1)
- 第9回 修士論文中間発表会の準備 (2)
- 第10回 修士論文中間発表会予行
- 第11回 中間発表会における問題点の整理
- 第12回 中間発表会における問題点修正
- 第13回 修士論文の仕上げ (1)
- 第14回 修士論文の仕上げ (2)
- 第15回 修士論文提出の最終報告

●事前学習

計画書に従い、翌週までに論文を執筆する。

各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

添削指導内容を踏まえ、翌週までに論文を訂正する。

各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

毎回の授業で課す論文6割、およびまとめの回に課す、口頭発表4割を合わせた総合評価とする。

●テキスト

必要に応じて、授業ごとに指示する。

●参考書・参考資料等

参加者の話し合いの内容に応じて、参考資料を授業ごとに準備・配布する。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

毎週火曜日-木曜日 12:30-12:50 (要事前連絡)

日本文学特別演習Ⅱ A

(春学期 / 2 単位)

田中 幹子

●テーマ

研究計画を確認し、修士論文を執筆する。

●授業概要

平安文化について歴史的側面から文学を読み解く —平安文学作品について—

●到達目標

文化学の高度な理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 研究計画の確認
- 第3回 研究進捗状況の報告 (1)
- 第4回 研究進捗状況の報告 (2)
- 第5回 研究進捗状況の報告 (3)
- 第6回 研究進捗状況の報告 (4)
- 第7回 研究進捗状況の報告 (5)
- 第8回 修士論文執筆内容の指導 (1)
- 第9回 修士論文執筆内容の指導 (2)
- 第10回 修士論文執筆内容の指導 (3)
- 第11回 修士論文執筆内容の指導 (4)
- 第12回 修士論文執筆内容の指導 (5)
- 第13回 修士論文執筆内容の指導 (6)
- 第14回 春学期の成果報告
- 第15回 夏期休暇中の研究予定確認

●事前学習

平安王朝期についての歴史的事実を予習。

各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

毎回学んだことをA4版1枚にまとめる。

各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

各回の担当者のプレゼンと発表資料6割、レポート4割。

レポート内容は、修士論文を念頭にテーマを決める。

●テキスト

小学館日本古典新全集『源氏物語』

●参考書・参考資料等

特になし。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

木曜日昼休み 於研究室

日本文学特別演習Ⅱ B

(秋学期 / 2 単位)

田中 幹子

●テーマ

研究テーマに則った修士論文を提出する。

●授業概要

平安文化について制度・風習の側面から文学を読み解く —源氏物語について—

●到達目標

文化学の高度な理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。

●授業計画

- 第1回 研究成果の報告
- 第2回 修士論文執筆内容の指導 (1)
- 第3回 修士論文執筆内容の指導 (2)
- 第4回 修士論文執筆内容の指導 (3)
- 第5回 修士論文執筆内容の指導 (4)
- 第6回 修士論文執筆内容の指導 (5)
- 第7回 修士論文執筆内容の指導 (6)
- 第8回 修士論文中間発表会の準備 (1)
- 第9回 修士論文中間発表会の準備 (2)
- 第10回 修士論文中間発表会予行
- 第11回 中間発表会における問題点の整理
- 第12回 中間発表会における問題点修正
- 第13回 修士論文の仕上げ (1)
- 第14回 修士論文の仕上げ (2)
- 第15回 修士論文提出の最終報告

●事前学習

平安王朝期の政治・婚姻について調べておく。

各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

毎回学んだことをA4版1枚にまとめる。

(修士論文訂正箇所及び補充)

各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

修士論文を一章一節ごとに提出。その結果により評価する。

●テキスト

小学館日本古典新全集『源氏物語』

●参考書・参考資料等

特になし。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

木曜日昼休み 於研究室

日本語特別演習 A

(春学期 / 2 単位)
渡辺 さゆり

●テーマ

研究計画を確認し、修士論文を執筆する。

●授業概要

本居春庭『詞八衢』における各動詞の証例を『古事記伝』の注釈と比較し精査する。精査した内容に基づいて修士論文作成の指導を行う。

●到達目標

文化学の高度な理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 研究計画の確認
- 第3回 研究進捗状況の報告 (1)
- 第4回 研究進捗状況の報告 (2)
- 第5回 研究進捗状況の報告 (3)
- 第6回 研究進捗状況の報告 (4)
- 第7回 研究進捗状況の報告 (5)
- 第8回 修士論文執筆内容の指導 (1)
- 第9回 修士論文執筆内容の指導 (2)
- 第10回 修士論文執筆内容の指導 (3)
- 第11回 修士論文執筆内容の指導 (4)
- 第12回 修士論文執筆内容の指導 (5)
- 第13回 修士論文執筆内容の指導 (6)
- 第14回 春学期の成果報告
- 第15回 夏期休暇中の研究予定確認

●事前学習

修士論文の完成に向けて毎回論文作成をすすめ、問題点や疑問点を明らかにしつつ研究報告の準備をすること。

各回約2時間の事前学習を要する。

●事後学習

疑問点・問題点を修正しながら、修士論文を執筆すること。

各回約2時間の事後学習を要する。

●成績評価

発表内容・研究内容の総合評価

●テキスト

特になし。

●参考書・参考資料等

特になし。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

講義終了後、7502 研究室にて対応します。(30 分程度)

日本語特別演習 B

(秋学期 / 2 単位)
渡辺 さゆり

●テーマ

研究テーマに則った修士論文を提出する。

●授業概要

本居春庭『詞八衢』における各動詞の証例を『古事記伝』の注釈と比較し精査した結果について検討・考察を加えながら修士論文完成に向けて指導を行う。

●到達目標

文化学の高度な理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。

●授業計画

- 第1回 研究成果の報告
- 第2回 修士論文執筆内容の指導 (1)
- 第3回 修士論文執筆内容の指導 (2)
- 第4回 修士論文執筆内容の指導 (3)
- 第5回 修士論文執筆内容の指導 (4)
- 第6回 修士論文執筆内容の指導 (5)
- 第7回 修士論文執筆内容の指導 (6)
- 第8回 修士論文中間発表会の準備 (1)
- 第9回 修士論文中間発表会の準備 (2)
- 第10回 修士論文中間発表会予行
- 第11回 中間発表会における問題点の整理
- 第12回 中間発表会における問題点修正
- 第13回 修士論文の仕上げ (1)
- 第14回 修士論文の仕上げ (2)
- 第15回 修士論文提出の最終報告

●事前学習

修士論文の完成に向けて毎回論文作成をすすめ、問題点や疑問点を明らかにしつつ研究報告の準備をすること。

各回約2時間の事前学習を要する。

●事後学習

疑問点・問題点を修正しながら、修士論文を執筆すること。

各回約2時間の事後学習を要する。

●成績評価

発表内容・研究内容の総合評価。

●テキスト

特になし。

●参考書・参考資料等

特になし。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

講義終了後、7502 研究室にて対応します。(30 分程度)

北方文化特別演習Ⅱ A

(春学期 / 2 単位)

本田 優子

●テーマ

研究計画を確認し、修士論文を執筆する。

●授業概要

アイヌ文化に関する調査研究を進め、収集した資料を確実に読み込むことにより研究の確度をたかめる。そのうえで、高度な質を有する修士論文を執筆できるように指導する。

●到達目標

文化学の高度な理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 研究計画の確認
- 第3回 研究進捗状況の報告 (1)
- 第4回 研究進捗状況の報告 (2)
- 第5回 研究進捗状況の報告 (3)
- 第6回 研究進捗状況の報告 (4)
- 第7回 研究進捗状況の報告 (5)
- 第8回 修士論文執筆内容の指導 (1)
- 第9回 修士論文執筆内容の指導 (2)
- 第10回 修士論文執筆内容の指導 (3)
- 第11回 修士論文執筆内容の指導 (4)
- 第12回 修士論文執筆内容の指導 (5)
- 第13回 修士論文執筆内容の指導 (6)
- 第14回 春学期の成果報告
- 第15回 夏期休暇中の研究予定確認

●事前学習

収集した資料を読み込む。

資料に基づき、執筆作業を進める。

各回約2時間の事前学習を要する。

●事後学習

指摘事項に基づき、記述を加筆修正する。

各回約2時間の事後学習を要する。

●成績評価

毎回の準備作業の質および、そのために必要だった作業量により評価する。

●テキスト

特になし。

●参考書・参考資料等

特になし。

●備考

特になし。

●オフスアワー

講義終了後、本田研究室（中央棟 7508）にて対応。（30分程度）

北方文化特別演習Ⅱ B

(秋学期 / 2 単位)

本田 優子

●テーマ

研究テーマに則った修士論文を提出する。

●授業概要

アイヌ文化に関する調査研究を進め、収集した資料を確実に読み込むことにより研究の確度をたかめる。そのうえで、高度な質を有する修士論文を執筆できるように指導する。

中間発表に向けて論点の整理を行い、指摘された事項を整理し、加筆修正する。

期日までに修士論文を完成させ提出する。

●到達目標

文化学の高度な理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。

●授業計画

- 第1回 研究成果の報告
- 第2回 修士論文執筆内容の指導 (1)
- 第3回 修士論文執筆内容の指導 (2)
- 第4回 修士論文執筆内容の指導 (3)
- 第5回 修士論文執筆内容の指導 (4)
- 第6回 修士論文執筆内容の指導 (5)
- 第7回 修士論文執筆内容の指導 (6)
- 第8回 修士論文中間発表会の準備 (1)
- 第9回 修士論文中間発表会の準備 (2)
- 第10回 修士論文中間発表会予行
- 第11回 中間発表会における問題点の整理
- 第12回 中間発表会における問題点修正
- 第13回 修士論文の仕上げ (1)
- 第14回 修士論文の仕上げ (2)
- 第15回 修士論文提出の最終報告

●事前学習

収集した資料を読み込む。

資料に基づき、執筆作業を進める。

各回約2時間の事前学習を要する。

●事後学習

指摘事項に基づき、記述を加筆修正する。

各回約2時間の事後学習を要する。

●成績評価

毎回の準備作業の質および、そのために必要だった作業量により評価する。

修士論文の最終的な内容により評価する。

●テキスト

特になし。

●参考書・参考資料等

特になし。

●備考

特になし。

●オフスアワー

講義終了後、本田研究室（中央棟 7508）にて対応。（30分程度）

北方文化史特別演習 A

(春学期 / 2 単位)

川上 淳

●テーマ

研究計画を確認し、修士論文を執筆する。

●授業概要

修士論文作成の基礎を指導する。

●到達目標

文化史の高度な理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。

●授業計画

第1回 ガイダンス

第2回 研究計画の確認

第3回 研究進捗状況の報告 (1)

第4回 研究進捗状況の報告 (2)

第5回 研究進捗状況の報告 (3)

第6回 研究進捗状況の報告 (4)

第7回 研究進捗状況の報告 (5)

第8回 修士論文執筆内容の指導 (1)

第9回 修士論文執筆内容の指導 (2)

第10回 修士論文執筆内容の指導 (3)

第11回 修士論文執筆内容の指導 (4)

第12回 修士論文執筆内容の指導 (5)

第13回 修士論文執筆内容の指導 (6)

第14回 春学期の成果報告

第15回 夏期休暇中の研究予定確認

●事前学習

毎回の指導に沿って、下調べしてくる。

各回約2時間の事前学習を要する。

●事後学習

毎回の指導に沿って、再度調べてくる。

各回約2時間の事後学習を要する。

●成績評価

毎回の指導による討論の内容で評価する。

●テキスト

特になし。

●参考書・参考資料等

その都度、指示する。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

金曜日 12:10～13:00

北方文化史特別演習 B

(秋学期 / 2 単位)

川上 淳

●テーマ

研究テーマに則った修士論文を提出する。

●授業概要

修士論文完成に向けた演習、個別指導。

●到達目標

文化史の高度な理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。

●授業計画

第1回 研究成果の報告

第2回 修士論文執筆内容の指導 (1)

第3回 修士論文執筆内容の指導 (2)

第4回 修士論文執筆内容の指導 (3)

第5回 修士論文執筆内容の指導 (4)

第6回 修士論文執筆内容の指導 (5)

第7回 修士論文執筆内容の指導 (6)

第8回 修士論文中間発表会の準備 (1)

第9回 修士論文中間発表会の準備 (2)

第10回 修士論文中間発表会予行

第11回 中間発表会における問題点の整理

第12回 中間発表会における問題点修正

第13回 修士論文の仕上げ (1)

第14回 修士論文の仕上げ (2)

第15回 修士論文提出の最終報告

●事前学習

毎回の指導を下調べしてくる。

各回約2時間の事前学習を要する。

●事後学習

毎回の指導の結果を、調査してくる。

各回約2時間の事後学習を要する。

●成績評価

毎回の討論と、修士論文の完成度合い。

●テキスト

特になし。

●参考書・参考資料等

その都度、指導する。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

金曜日 12:10～13:00

比較文化特別演習 I A (春学期 / 2 単位) 小笠原 はるの

- **テーマ**
研究計画を確認し、修士論文を執筆する。
- **授業概要**
比較文化、異文化コミュニケーション、翻訳研究の角度で研究計画の作成に理論と研究方法を提示する。
- **到達目標**
文化学の高い理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。
- **授業計画**
第1回 ガイダンス
第2回 研究計画の確認
第3回 研究進捗状況の報告 (1)
第4回 研究進捗状況の報告 (2)
第5回 研究進捗状況の報告 (3)
第6回 研究進捗状況の報告 (4)
第7回 研究進捗状況の報告 (5)
第8回 修士論文執筆内容の指導 (1)
第9回 修士論文執筆内容の指導 (2)
第10回 修士論文執筆内容の指導 (3)
第11回 修士論文執筆内容の指導 (4)
第12回 修士論文執筆内容の指導 (5)
第13回 修士論文執筆内容の指導 (6)
第14回 春学期の成果報告
第15回 夏期休暇中の研究予定確認
- **事前学習**
資料の熟読、発表の準備をしておくこと。
各回約 10 時間の事前学習を要する。
- **事後学習**
提示された課題を完成すること。
各回約 10 時間の事後学習を要する。
- **成績評価**
修士論文の進捗状況および論文内容 100%
- **テキスト**
必要に応じて紹介する。
- **参考書・参考資料等**
必要に応じて紹介する。
- **備考**
特になし
- **オフィスアワー**
講義期間中毎週水曜日 16:10~17:00 7512 研究室

比較文化特別演習 I B (秋学期 / 2 単位) 小笠原 はるの

- **テーマ**
研究テーマに則った修士論文を提出する。
- **授業概要**
比較文化、異文化コミュニケーション、翻訳研究の理論と研究方法に基づいて研究論文の作成を指導する。
- **到達目標**
文化学の高い理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。
- **授業計画**
第1回 研究成果の報告
第2回 修士論文執筆内容の指導 (1)
第3回 修士論文執筆内容の指導 (2)
第4回 修士論文執筆内容の指導 (3)
第5回 修士論文執筆内容の指導 (4)
第6回 修士論文執筆内容の指導 (5)
第7回 修士論文執筆内容の指導 (6)
第8回 修士論文中間発表会の準備 (1)
第9回 修士論文中間発表会の準備 (2)
第10回 修士論文中間発表会予行
第11回 中間発表会における問題点の整理
第12回 中間発表会における問題点修正
第13回 修士論文の仕上げ (1)
第14回 修士論文の仕上げ (2)
第15回 修士論文提出の最終報告
- **事前学習**
資料の熟読、発表の準備をしておくこと。
各回約 10 時間の事前学習を要する。
- **事後学習**
提示された課題を完成すること。
各回約 10 時間の事後学習を要する。
- **成績評価**
修士論文の進捗状況および論文内容 100%
- **テキスト**
必要に応じて紹介する。
- **参考書・参考資料等**
必要に応じて紹介する。
- **備考**
特になし
- **オフィスアワー**
講義期間中毎週水曜日 16:10~17:00 7512 研究室

比較歴史特別演習 I A

(春学期 / 2 単位)
高瀬 奈津子

●テーマ

研究計画を確認し、修士論文を執筆する。

●授業概要

本演習は中国北朝隋唐史分野で修士論文を作成しようとする者を対象とする。

参加者の研究テーマをもとに、ある時代の通史を把握するために、おもに政治史を中心とする研究史を数回発表する。

●到達目標

文化学の高度な理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。

●授業計画

第1回 ガイダンス

第2回 研究計画の確認

第3回 研究進捗状況の報告 (1)

第4回 研究進捗状況の報告 (2)

第5回 研究進捗状況の報告 (3)

第6回 研究進捗状況の報告 (4)

第7回 研究進捗状況の報告 (5)

第8回 修士論文執筆内容の指導 (1)

第9回 修士論文執筆内容の指導 (2)

第10回 修士論文執筆内容の指導 (3)

第11回 修士論文執筆内容の指導 (4)

第12回 修士論文執筆内容の指導 (5)

第13回 修士論文執筆内容の指導 (6)

第14回 春学期の成果報告

第15回 夏期休暇中の研究予定確認

●事前学習

毎回、論文の進捗状況をまとめた資料を作成すること。

各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

報告の結果の「振り返り」を行い、次回の授業の時に「振り返り」をどう反映したか、報告できるようにすること。

各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

研究発表により評価を行う。

●テキスト

特になし。

●参考書・参考資料等

随時、紹介する。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

講義期間中毎週火曜日 12:20～12:50 7523 研究室

比較歴史特別演習 I B

(秋学期 / 2 単位)
高瀬 奈津子

●テーマ

研究テーマに則った修士論文を提出する。

●授業概要

本演習は中国北朝隋唐史分野で修士論文を作成しようとする者を対象とする。論文の完成に向けた作業を行う。

●到達目標

文化学の高度な理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。

●授業計画

第1回 研究成果の報告

第2回 修士論文執筆内容の指導 (1)

第3回 修士論文執筆内容の指導 (2)

第4回 修士論文執筆内容の指導 (3)

第5回 修士論文執筆内容の指導 (4)

第6回 修士論文執筆内容の指導 (5)

第7回 修士論文執筆内容の指導 (6)

第8回 修士論文中間発表会の準備 (1)

第9回 修士論文中間発表会の準備 (2)

第10回 修士論文中間発表会予行

第11回 中間発表会における問題点の整理

第12回 中間発表会における問題点修正

第13回 修士論文の仕上げ (1)

第14回 修士論文の仕上げ (2)

第15回 修士論文提出の最終報告

●事前学習

毎回、論文の進捗状況をまとめた資料を作成すること。

各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

報告の結果の「振り返り」を行い、次回の授業の時に「振り返り」をどう反映したか、報告できるようにすること。

各回約1時間の事後学習を要する。

●成績評価

研究発表により評価を行う。

●テキスト

特になし。

●参考書・参考資料等

随時、紹介する。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

講義期間中毎週火曜日 12:20～12:50 7523 研究室

先史文化特別演習Ⅲ A

(春学期 / 2 単位)

川名 広文

●テーマ

研究計画を確認し、修士論文を執筆する。

●授業概要

『日本考古学』、『考古学雑誌』、『考古学研究』、『北海道考古学』などの雑誌論文を参考にして、課題の設定、資料収集、分析、考察、結語などの論証手順に加え、図表、参考文献、注、図表典拠などの作法を学ぶ。

●到達目標

文化学の高度な理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。

●授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 研究計画の確認
- 第3回 研究進捗状況の報告 (1)
- 第4回 研究進捗状況の報告 (2)
- 第5回 研究進捗状況の報告 (3)
- 第6回 研究進捗状況の報告 (4)
- 第7回 研究進捗状況の報告 (5)
- 第8回 修士論文執筆内容の指導 (1)
- 第9回 修士論文執筆内容の指導 (2)
- 第10回 修士論文執筆内容の指導 (3)
- 第11回 修士論文執筆内容の指導 (4)
- 第12回 修士論文執筆内容の指導 (5)
- 第13回 修士論文執筆内容の指導 (6)
- 第14回 春学期の成果報告
- 第15回 夏期休暇中の研究予定確認

●事前学習

指示された雑誌論文を精読し、疑問点や問題点を拾い出してくる。各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

検討した雑誌論文を再読し、参考にできる長所を学ぶ。各回約50分の事後学習を要する。

●成績評価

毎回の出席と取組む姿勢で評価する。

●テキスト

その都度、優れた雑誌論文を指示する。

●参考書・参考資料等

近年の関係する専門書や優れた雑誌論文。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

火曜日 12:15～12:55 7503 研究室

先史文化特別演習Ⅲ B

(秋学期 / 2 単位)

川名 広文

●テーマ

研究テーマに則った修士論文を提出する。

●授業概要

『日本考古学』、『考古学雑誌』、『考古学研究』、『北海道考古学』などの雑誌論文を参考にして、課題の設定、資料収集、分析、考察、結語などの論証手順に加え、図表、参考文献、注、図表典拠などの作法を学ぶ。

●到達目標

文化学の高度な理解と研究を踏まえつつ、研究テーマにおける専門性を深めた修士論文を完成する。

●授業計画

- 第1回 研究成果の報告
- 第2回 修士論文執筆内容の指導 (1)
- 第3回 修士論文執筆内容の指導 (2)
- 第4回 修士論文執筆内容の指導 (3)
- 第5回 修士論文執筆内容の指導 (4)
- 第6回 修士論文執筆内容の指導 (5)
- 第7回 修士論文執筆内容の指導 (6)
- 第8回 修士論文中間発表会の準備 (1)
- 第9回 修士論文中間発表会の準備 (2)
- 第10回 修士論文中間発表会予行
- 第11回 中間発表会における問題点の整理
- 第12回 中間発表会における問題点修正
- 第13回 修士論文の仕上げ (1)
- 第14回 修士論文の仕上げ (2)
- 第15回 修士論文提出の最終報告

●事前学習

指示された雑誌論文を精読し、疑問点や問題点を拾い出してくる。各回約1時間の事前学習を要する。

●事後学習

検討した雑誌論文を再読し、参考にできる長所を学ぶ。各回約50分の事後学習を要する。

●成績評価

毎回の出席と取組む姿勢で評価する。

●テキスト

その都度、優れた雑誌論文を指示する。

●参考書・参考資料等

近年の関係する専門書や優れた雑誌論文。

●備考

特になし。

●オフィスアワー

火曜日 12:15～12:55 7503 研究室